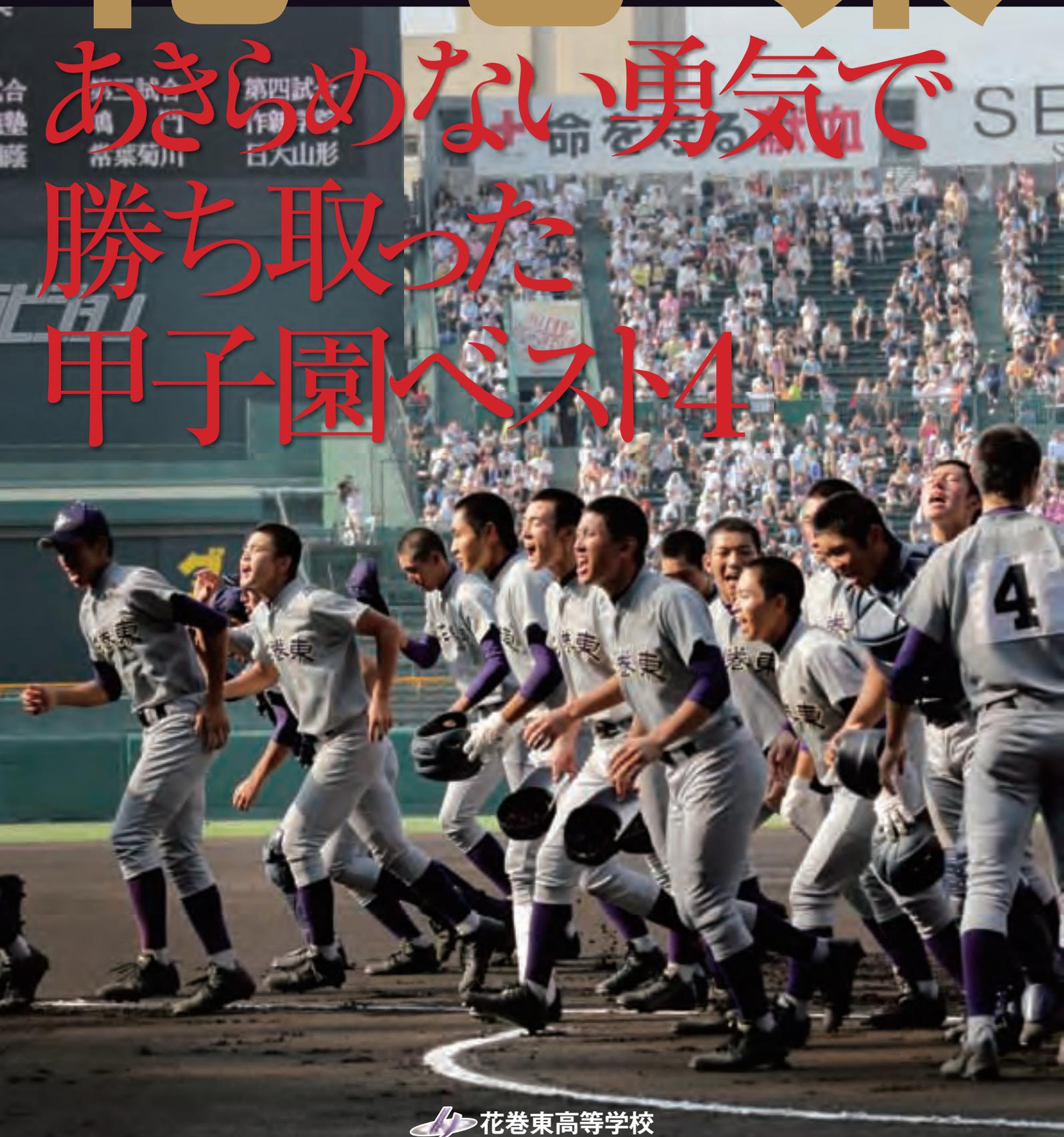


NEVER NEVER GIVE UP!

# 花巻東

硬式野球部甲子園出場記念誌 2013

あきらめない、勇気で  
勝ち取った  
甲子園ベスト4



**花巻東高等学校硬式野球部**

**甲子園出場記念誌 2013**

勝ち取った

勇気で

あきらめなさい

NEVER NEVER GIVE UP! HANAMAKI HIGASHI



# 甲子園 ベスト4

最初から強いチームではなかった。  
スーパースターの存在もなかった。  
昨年秋、新チームで臨んだ岩手県秋季大会では、まさかの1回戦敗退。  
冬の厳しい練習を重ねて臨んだ春季大会も、3回戦で敗れ東北大会にすら出場できなかった。

それでも彼らは下を向くことはなかった。決してあきらめない。それが花巻東だ。

そして今年7月の夏の岩手県大会。  
最後の最後で優勝を果たし、甲子園への切符を勝ち取った。  
当然ながら、高校野球関係者の間では、彼らの評判は高いものとは言えなかった。  
ところが、甲子園での花巻東は強かった。  
粘り強く泥臭いプレーで、次々と強豪校を打ち破った。

甲子園ベスト4 ——— 彼らの軌跡を振り返る。

## 記念誌発刊にあたり



花巻東高等学校硬式野球部  
甲子園大会出場支援協議会  
会長 宮澤 啓祐

「第九十五回全国高等学校野球選手権記念大会」出場記念誌の発刊にあたり、一言ごあいさつを申し上げます。

日頃より、当「花巻東高等学校硬式野球部甲子園大会出場支援協議会」には、皆様より多大なるご支援とご協力をいただいておりますことに、改めて感謝とお礼を申し上げます。

さて、この度の「第九十五回全国高等学校野球選手権記念大会」に、通算九回目の甲子園出場を果たし、さらには二度目の全国ベスト4という偉業を成し遂げられました花巻東高等学校硬式野球部の選手諸君をはじめ、指導に当たられた先生方、ご父母の皆様、そして学校関係者各位のご努力に敬意を表し、心よりお祝いを申し上げます。

選手諸君は、今回の大会でも全国の名だたる強豪校を相手に、持てる力を十二分に発揮し、鍛え抜かれた機動力を駆使した全員野球と精神力、そして若者の底しれぬ可能性を感じさせる数々のファインプレーで、まさに全国の高校野球ファンを魅了いたしました。そして東日本大震災の復興途上にある岩手県民に野球を通じて感動を与え、前へ進む勇氣と力を喚起させてくれました。

その選手諸君の、阪神甲子園球場での感動と躍動の一こま一こまを、永く広く市民・県民に伝えるとともに、今後の復興への氣力の一助にでもなればという思いで、この度記念誌の発刊に至りました。

選手諸君にはこの貴重な経験を糧とし、一人ひとりの人生を支える原動力として、そして人間的にもよりいっそう成長・飛躍されることをご期待申し上げます、さらには花巻東高等学校と硬式野球部のますますの活躍とご発展を心からお祈り申し上げ、記念誌発刊のごあいさついたします。

## 祝 辞



花巻市長  
大石 満雄

第95回全国高等学校野球選手権記念大会において、みごとベスト4という輝かしい成績を収められました花巻東高等学校硬式野球部の活躍に、市民を代表して心からお祝いと感謝のことばを申し上げます。

東北に「花巻東」あり。今や甲子園の常連校、全国球児あこがれの学校となった花巻東高等学校。試合に対する真摯な姿勢と最後まで諦めない粘り強さ、爽やかでハツラツとしたプレーに全国のファンが歓喜にあふれました。たとえ先行されても焦ることなく、必ず追いつき追い越す、君たちの心の強さ、日頃の生活全てに対する誠実な姿勢こそが花巻東の底力となっていることを私たちは知っています。市民はもとより東日本大震災からの復興を進める被災地に勇気と希望を与え、ともに、県民の大きな誇りとなりました。

また、昨年末に開催した「ふるさと復興応援イベント」では、みなさんの先輩の菊池雄星選手と大谷翔平選手がボランテアで参加していただき、大好評を博しました。開催にあたり、硬式野球部をはじめ関係各位のご協力に深く感謝いたします。

平成26年、花巻市では、「市民パワーをひとつに歴史と文化で拓く 笑顔の花咲く温か都市 イーハトーブはなまき」を将来都市像とする新しいまちづくり総合計画が始まります。27の自立した地域が集り、一つに融合することによって花巻市が光り輝く。個性あふれる選手が結集し、大きな力を発揮する「チーム花巻東」は、まさに花巻市が目指す将来の都市像です。

選手のみなさんは、野球で培った経験を生かし、これからの将来、それぞれの道でさらに大きな力を発揮されることでしょう。花巻東高等学校のますますの発展をお祈りし、お祝いとお礼のことばといたします。

## 感謝とお礼



学校法人花巻学院  
理事長

伊藤 明子

第九十五回全国高等学校野球選手権記念大会に出場した際には、全国のたくさんの方々、そして同窓会・PTAの方々のおかげで温かい応援に深く深く感謝申し上げます。

「本当に有難うございました。」

また、選手はもとより、監督・部長・コーチ陣・応援した生徒たちやそのご家族のみな様へも篤くお礼申し上げます。

今年の比較的涼しかった岩手の夏から、あの熱い大阪へ行き、「体調は大丈夫だろうか？」と思ってもいましたが、選手たちはそんな私の心配など吹き飛ばしてくれました。

一回戦より二回戦、そして、回を重ねる度に「一人はみんなの為に！ みんなは一人の為に！」と言うことばがあてはまるかのように、徐々に強さが増してきて、甲子園に行く度に「また来れる！」「また来れる」と思わせてくれる戦いぶりでした。

そして、最後には全国ベスト4という嬉しい成績で、岩手に帰ってきてくれました。

花巻のみな様方はもとより、被災された方々から、「力をもらったヨ」とか、「一番の励みだ！」とおっしゃっていただき、私の方が胸が厚くなりました。

この度、この感動と栄光を記念いたしまして、記念誌が発刊されることとなりました。

あの感動のドラマを折に触れ、思い出し、お心に残していただければ、たいへん幸いに存じます。

最後になりましたが、この記念誌の発刊に携わった関係者のみな様方への敬意と謝意を表しまして、発刊のごあいさつと感謝とお礼のことばとさせていただきます。



- 04 記念誌発刊にあたり  
花巻東高等学校硬式野球部  
甲子園大会出場支援協議会 会長 宮澤 啓祐
- 05 祝 辞  
花巻市長 大石 満雄
- 06 感謝とお礼  
学校法人花巻学院 理事長 伊藤 明子
- 08 記念誌発刊にあたって  
花巻東高等学校 校長 小田島 順造

12 第95回全国高等学校野球選手権記念大会

# 夏の甲子園 激闘記

個々の力を結集し、ひたむきに戦った全4試合

- 14 **開会式** 2年ぶり7回目の出場を果たした花巻東
- 16 **2回戦** VS彦根東(滋賀) 県勢最多得点記録に並ぶ9点を奪い快勝
- 22 **3回戦** VS済美(愛媛) センバツ準優勝の強豪済美を破り8強!
- 28 **準々決勝** VS鳴門(徳島) まさに逆転の花巻東! あきらめない心がかんだ大逆転
- 34 **準決勝** VS延岡学園(宮崎) 甲子園4強, 最後までひたむきに戦い続けた選手たち

40 第68回国民体育大会高等学校(硬式野球)競技会

4年ぶりの国体出場

最後まで、笑顔で全力プレーを貫いた花巻東ナイン

- 41 コラム **岸里亮祐選手**, 北海道日本ハムファイターズに入団決定!

## 42 甲子園への道

2012年秋の岩手県大会~2013年夏の岩手県大会

50 **佐々木洋**監督インタビュー

2013年夏の軌跡は、  
花巻東高校にとって大きな財産になった。

55 先輩からのメッセージ

埼玉西武ライオンズ

北海道日本ハムファイターズ

**菊池雄星**選手 & **大谷翔平**選手

58 選手たちは野球を通じて本校の教育理念を表現している。

花巻東高等学校 副校長 大森 松司

60 資料編

63 編集後記

64 奥付

野球部の姿には、  
人間として持っていないければ  
いけないものが<sup>にじ</sup>滲み出ている

記念誌発刊にあたって

花巻東高等学校 校長

**小田島順造**



## 二十一世紀の人材育成

本校は、昭和五十七年に、全国でも稀まれな私学同士の統合を経て、新花巻東高等学校としてスタートしました。これは花巻市が掲げた「花巻市都市構想」の一環であり、二十一世紀の教育行政を見据えた高い識見と展望のもと、花巻市教育委員会の英断と斡旋によって実現されたものでした。一九五六年（昭和三十一年）創立の花巻商業高等学校（のちの富士短期大学附属花巻高等学校）と、一九五七年（昭和三十二年）創立の谷村学院高等学校を統合して誕生した学校・花巻東高等学校。その学校統合は、とても画期的な取り組みであり、「新たな道を切り拓ひらき、私立の中等教育機関として、より私学の特色ある教育の創出」を目指して誕生しました。

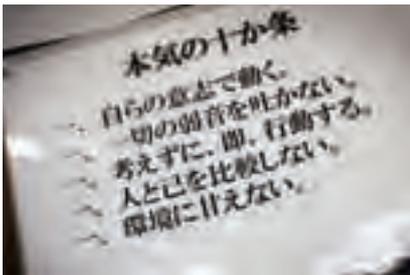
統合後の学校は勢いが増し、花巻市当局の援助を受けながら新天地に新校舎を完成させ、受験生も増え続けましたが、その後の時代の流れと少子化による社会の変化は、本校へも大きな影響を及ぼしつつありました。校内に危機感が漂ひらう中、本校がさらに飛躍するためにはどうすればよいか、その方策を真剣に考えるようになり、それが学校改革・教育改革へと進み、今日に至っています。

改革にあたっては、「学校としてのあるべき姿を明確にしなければならぬ」という考えから、生徒や教職員などを対象としたアンケート調査を実施しました。徹底した現状分析の結果、「生徒の人間力を高めよう。そのためには、創立者の意思や教育理念を明確にし、私学の独自性をはつきりと打ち出そう」という方向で改革を進めていくことになりました。

## 学校改革後の効果

本校の「建学の精神」は、高潔かつ清新堅実な校訓に表れています。「感謝」「報恩」「奉仕」「勤勉」「進取」の精神を醸成し、「勤勉にして進取の気概を持ち、学問を尊び、正義を愛する」という創立者が求めた人間教育を根底とした教育方針を貫くことであります。

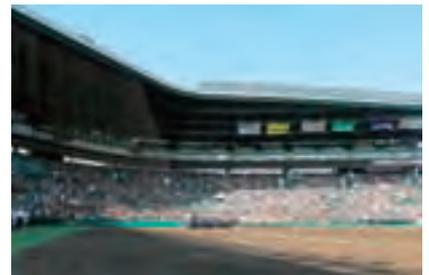
この校訓の具現化の柱になっているのが、森信三先生（一八九六）



野球部の練習場に記される『本気の十か条』。その言葉を胸に、選手たちは日々過ごす



グラウンド内にある一室には、これまでの栄光が詰まった記念品が並び



2013年夏はスター選手不在の中、結束力で甲子園4強を果たした

一九九二）が提唱した「師弟同行」と「立腰教育」です。これは、本校の特色として生徒の躰しづや、精神的成長の促進に役立っています。その一つ目の師弟同行とは、「教師が変わらなければ生徒は変わらない」という姿勢を基本とした教育で、すなわち、師自らが率先垂範して、背中で生徒を導き、諭すことです。具体的には「礼を正し、場を浄め、時を守る」ことであり、「礼を正し」とは、自らあいさつをし、返事をするということです。あいさつは、人間関係の呼応性を育て、さわやかな「ハイ」は、生徒の心を変えていきます。

「場を浄め」とは、単に環境の美化を目的とするのではなく、場を浄める行動を繰り返すことによって、心も磨かれていくことを表します。「時を守る」は、五分前精神に徹し、「決めたとおりに行動する」ということであり、これらのことは、どれも人間としての不可欠な資質であります。

柱の二つ目である「立腰教育」とは、腰骨を立て背筋を伸ばし、人間として正しい姿を身に付ける取り組みのことです。腰は身体の中心でありますし、一生懸命取り組むことを「本腰を入れる」ともいいます。姿勢が美しくなると、心もそれに伴い美しくなっていきます。

学校生活における身のこなしである礼法についても指導し、自主性・主体性・集中力・持続力・粘り強さ・根気強さを養成することを説き、今日までともに実践されてきています。

こうした「師弟同行」「立腰教育」は、基本的には、物の考え方や、生き方を身に付けさせることが目的です。そうした改革後の学校は雰囲気が一変し、元気なあいさつが校内外に広がり、すがすがしい秩序が生まれ、はつらつとした生氣と活気が漂ひらうようになってきました。

こうした学校改革・教育改革の成果は、大学進学実績にも表れてきました。また、野球部をはじめとした部活動においても、全国へ駒を進めるといった活躍が顕著になり、「躍進はつらつ花巻東」の名声を高めているところであります。

本校の目指す教育は、人間の生き方の基本となる資質を磨くことです。大木が風雪に耐え、大きく成長するには根が地にしっかりと張りついていなければならず、人間も同様に、どれだけ人間としての資質を磨くかということ、つまりは人格形成がたいせつだと思っています。

その考えから、教育改革の一つとして展開されてきたのが、あいさつの指導です。

早朝七時半。私は校門の前に毎日立って、登校する生徒たちにあいさつし、生徒を迎えていました。雨の日も風の日も、生徒たちに「おはよう」と言葉かけをします。取り組みは徐々に広がり、いつしか多くの生徒たちが、「おはようございます」とあいさつを返すようになっていきました。その光景は今も当時と変わりません。我々教職員が率先垂範をし、「師弟同行」の精神を自らの行動で示す。今、その改革の成果が実を結び、学業や部活動など、いろいろなところに取り組みの成果が表れていると実感しています。

本校では、授業は「リツヨウ（立腰）！」という掛け声から始まります。授業が終わる時、または全校集会でも「リツヨウ！」という掛け声があります。「立腰教育」のもと、本校の生徒たちは自らを磨いているのです。

日常の積み重ねが、人間を成長させている。人と人が対面しながら、お互いに学び合い、心の触れ合いを通して自らを高めていく。その姿は、本校野球部が評価されている部分でもあると思っています。本校の取り組みそのものが野球部の姿であり、野球の技術に加えて心が磨かれている部分が周囲の大きな評価につながっていると実感しています。

## 「決して諦めない」の精神

野球部の姿には、人間として持っていなければならないものが滲み出ています。

それは、単に野球ということではなく、技術を越えた人間味のある魂の入った取り組みが見られるからです。野球部員の目標は、野球だけではなく、学習や生活などを含めたすべての取り組みにおいて「日本一」を目指すというものであり、その言葉に象徴されているように感じます。

たとえば、試合中に失敗したとしてもプラス思考で物事を据え、お互いに助け合う姿が自然に出てきますし、苦しい場面でも笑顔を見せ

記念誌発刊にあたって

花巻東高等学校 校長

## 小田島順造

野球部の姿には、人間として持っていなければいけないものが滲み出ている



それぞれの立場で、それぞれの目的に向かい、練習に励む選手たち



目標や教訓は、野球部の選手たちの日々のモチベーションになっている

合うなど、周りの人を引きつける魅力があります。

また、彼らはピンチのときも動じません。「必ずチャンスはやって来る」と信じ、そして仲間たちを全面的に信頼した全員野球を貫きます。決して最後まで諦めない強い気持ちを持ち続けながら。

これが本校野球部の姿と言つてよいと思います。私が校長になってから甲子園に七回行かせてもらいましたが、子どもたちからの贈り物としては、あまりにも大き過ぎて幸運なことでした。このような経験は全国でもめずらしいのではないかと思います。感謝しています。

こうした野球部の活躍は、日頃の厳しい取り組みによって成果を上げていますが、それは、ただ単に強いから勝ったということだけでなく、「日本一」という高い目標を掲げて弛まぬ努力を重ね、よく学び、よく研鑽された感性と、鍛え抜かれた強い精神力によるものだと思います。

全校集会などで生徒を激励するために私が話すことは、「私は試合に勝利した者だけを賞賛するのではない。各クラブには、それぞれの事情があつて成果を上げることが難しい部もあるだろうが、最もたいせつなことは、クラブ活動の中から、自分を高めるために何を学び、どのような成長をしようとしているのかを意識して取り組んでいる姿が一番大事である」というものです。そういった意識を根付かせ、高校生活の三年間で、人生を支える「力」を育んで欲しいと思います。

## 全員野球が見せた感動

本校にとって七度目の夏の甲子園出場となった二〇一三年。昨夏のチームには、菊池雄星君（現・埼玉西武ライオンズ）や大谷翔平君（現・北海道日本ハムファイターズ）といった、野球ファンを沸かすようなスター選手はいませんでした。固い結束力で戦い、かつての花巻東にはない新たな魅力で野球ファンを熱狂させました。力を結集すれば何事も貫けると実感した夏でした。ある意味で、ここ数年のチームカラーとは違う戦いが、そこにはあつたと思います。先輩たちから後輩たちへ受け継がれてきた花巻東の野球魂が発揮されつつも、二〇一三年夏のチームならではの結束力で戦ってくれました。飛び抜けたスー

パースター不在でも甲子園ではベスト4という偉業を成し遂げたことは快挙であり、賞賛に値することだと思っています。その経験も踏まえて、これからのチームにはこれまで積み重ねてきた成果をさらに高めてもらいたいし、それ以上に、個々が自分を高める意識をさらに強くして欲しいと願っています。自分自身が高まるということは、結局はチームの成果につながるからです。

## たとえ負けたとしても 周囲から「惜しまれるようなチーム」であること

毎年、チームはいろいろな形に変わっていくものだと思います。ただ、花巻東野球部の神髄である部分、つまり脈々と受け継がれてきた精神はこれからも大事にしていかなければならないと思っています。たとえば、野球に対する真摯な取り組み、そして相手チームに敬意を抱く心、あるいは礼儀正しさなど、花巻東らしい野球をすることです。そうした中から自然と生まれるプレーは全国の高校野球ファンに感動を与えていると思っています。それが高校野球のすばらしさであり、野球ファンから求められることだと思っています。その精神をこれからも大事にして欲しい。なんと言っても、高校野球の魅力は、清新さに溢れ、気迫に満ち、ひたすら白球を追いかける姿であり、それがシナリオのないドラマとなり野球ファンの心をとらえ、大きな感動と勇気を与えるものだと思います。これからも花巻東野球部のチームカラーを全面に打ち出し、花巻東らしさを全国に発信して欲しいと思います。そのような選手たちの活躍が定着するならば、学校としては、この上ない喜びです。

また、スポーツの世界には必ず勝者と敗者が生まれます。でも、そこで大事なことは、たとえ負けたとしても周囲から惜しまれるようなチームであることだと思っています。それもまた、私が日頃から生徒たちに伝えていることです。「結果として花巻東は負けたものの、とても素晴らしいチームだった」と評価されるようになって欲しい。どの部に対しても、そういう言葉をもらえるようなプレーをして欲しいと願っています。その中で、野球部はクラブ活動において、さらに学



校舎とグラウンドをつなぐ小さな階段は、09年のメンバーたちが築いたもの



甲子園期間中も宿泊するホテルの周辺を、丁寧に掃除する野球部



OBたちが技術と人間力を磨いてきたグラウンドでは、日々、選手たちの声が響く

校全体においても、模範になる貴重な存在です。彼らの明るく、そしてハツラツとした言動は、学校全体の士気を高めていると思います。たとえば、野球部の元気な姿に刺激されて他の生徒も元気にあいさつする。そういう光景が広がってきたのは事実です。今、生徒のほとんどは目的意識をしっかりと持って学校生活を送っています。新しい秩序が生まれているのは確かです。その模範となっているのが、野球部なのです。

## 躍動する野球部の春

春ともなれば、野球部は100名を超える大所帯になります。その中で、レギュラーになれる選手、またはベンチ入りできる選手は限られます。それでも、誰一人として下を向いている選手はいません。要するに、3年間のクラブ活動でそれぞれが目的意識をしっかりと持って、日々、練習に励んでいるからです。レギュラーとしてチームの勝利を目指す者。または、裏方としてチームの勝利のために全力を注ぐ者。あるいは、3年間の経験を通じて、将来は指導者になることを目指したいと思う者。それぞれの立場で、それぞれの目的に向かって活動する姿が野球部にはあります。かつて私が感心したのは、二〇〇九年のメンバーの姿でした。夏の大会を前にベンチ入りできなかった3年生部員が中心になって、校舎からグラウンドにつながる土手に小さな階段を作りました。これは、レギュラー選手たちが悪路で怪我をしないように、移動しやすくするための階段です。スコップを手に他のメンバーのために作ったその階段は「日本一への道」と名付けられました。陰ながら支える彼らの姿を目の当たりにして、私は涙が出ました。そんな支え合う姿もまた、理想的だと感じました。その精神は、これからの野球部にも引き継いでいってほしいものです。

ここに改めて、第95回全国高等学校野球選手権記念大会において七回目の夏の甲子園出場を果たした野球部員に対して敬意を表するとともに、念願の「日本一」に挑戦し、実現してくれることを期待します。



個々の力を結集し、ひたむきに戦った全4試合

# 園 激闘記



# 夏の甲子

第95回全国高等学校野球選手権記念大会

開会式

# 2年ぶり7回目の

# 出場を果たした花巻東



2013年の夏の甲子園は、第95回の記念大会となった。その大会にふさわしいビッグゲストが甲子園に姿を現したのは、開会式が行なわれた8月8日(木)のことだった。

松井秀喜氏。言わずと知れた、星陵(石川)で甲子園出場を果たし、プロでも異彩を放った元メジャーリーガーだ。12年のシーズン限りで現役を引退した松井氏が、甲子園に足を踏み入れたのは11年ぶりだった。ちなみに、スタンドから甲子園を見たのは中学時代以来だったという。

「変わらないですね、甲子園はこの場所で開催したことが、僕の原点。選手たちには、自分たちのプレーを思い切りして欲しい」

開会式を見届けた松井氏は、懐かしさを感じながら、甲子園の後輩たちにエールを送った。

出場校は、例年と変わらない49校。そのうち10校が初出場という中で、昨夏も各地の強豪校が顔をそろえた。大会前に注目されたのは、前年秋に明治神宮大会を制した仙台育英(宮城)、春のセンバツ大会で優勝した浦和学院(埼玉)、同大会準優勝の済美(愛媛)。さらに、全国制覇の経験がある明德義塾(高知)、大阪桐蔭(大阪)、作新学院(栃木)、日大三(西東京)、横浜(神奈川)、常総学院(茨城)といった甲子園の常連校も、上位進出が予想された。

トーナメント戦では、組み合わせによって大会の様相が大きく変わる。優勝まで上り詰めるためには、最大で6試合を勝ち抜かなければならない。そのため、勝ち上がる道のりでの対戦校や試合日程は、実力とともに勝敗を左右する大きな要素となるものだ。そんな中、昨夏の甲子園では19年ぶりに「全試合抽選」という組み合わせ方式が取られた。大会前の組み合わせ抽選会では、緒戦(1、2回戦の計24試合)の対戦だけを決め、その後は試合ごとに勝ったチームが抽選。次の試合日程が決まるというものだった。「試合間隔に



2  
3



第95回全国高等学校野球選手権記念大会

## 夏の甲子園 激闘記

個々の力を結集し、  
ひたむきに戦った全4試合

1

■2年ぶり7回目の出場となった夏の甲子園。選手たちは意気揚々と行進した。■第95回の記念大会となった昨夏の甲子園には、多くの観衆が詰め掛けた。■花巻東は、今や全国区となった

### 登録メンバー

背番号	ポジション	氏名	学年	投打	身長	体重	出身中学
1	(左)	岸里 亮佑選手	3	右左	181	75	長内
2	(捕)	山下 駿人選手	3	右右	175	78	一戸
3	(三)	多々野将太選手	3	右左	175	68	桜丘
4	(控)	◎鹿糠 俊輝選手	3	右右	177	72	久慈
5	"	三原 龍騎選手	3	右左	179	70	塚越
6	(遊)	茂木 和大選手	2	右右	178	75	水沢南
7	(控)	阿部 友哉選手	3	右左	161	60	宮野目
8	(中)	千葉 翔太選手	3	左左	156	56	南都田
9	(右)	太田 亮佑選手	2	右左	180	80	見前
10	(控)	河野 幹選手	3	左左	185	74	宮守
11	"	中里 優介選手	3	左左	172	72	軽米
12	"	照井 希望選手	3	右右	176	76	宮守
13	"	小林 勇大選手	3	右左	166	64	大潟
14	(二)	八木 光巨選手	2	右左	165	65	宮古・河南
15	(控)	武田 大生選手	3	右左	172	70	末崎
16	(一)	小熊 雄飛選手	2	右左	174	70	宮古西
17	(投)	細川 稔樹選手	2	左左	174	70	矢巾
18	(控)	遠藤 諒選手	2	右右	174	72	川崎

配慮した仕組み」だがというが、例年とは一味違う戦いを強いられるだけに、大会前の各高校には多少の戸惑いがあった。

2年ぶり7回目の出場となった本校の緒戦は、大会6日目。相手は初出場の彦根東（滋賀）に決ま

る。甲子園の空気に慣れる上では、開幕から時間が空く試合日程は幸運だった。彦根東のエースは左腕。その対策を考え、入念にコンディショニングを整えた選手たちは、緒戦に向けて徐々に気持ちを高ぶらせていった。



# 9点を奪い快勝!

2nd round

# 県勢最多

# 得点記録に並ぶ

2回戦 8月13日(火) 観衆47,000人

VS. **彦根東**  
(滋賀)

花巻東	0	2	1	2	0	0	1	3	0	9
彦根東	0	0	0	0	2	0	0	3	0	5

熱い戦いの始まりは、  
2回表だった

薄雲が上空に広がる甲子園。身体にまとわりつく暑さは、一向に衰えない。だが、時折流れ込む風は、どこことなく心地良かった。

8月13日(火)、大会6日目。一塁側に陣取った本校は、その心地良い風を勝利につながる熱風に変えた。

熱い戦いの始まりは、2回表だった。1死から5番・多々野将太選手が一、二塁間を抜けるヒットで出塁。続く6番・太田亮佑選手が、内角高めのボールを右翼線に運んで三塁打。一塁走者の多々野選手が一気にホームへ還って、まずは1点を奪った。さらに、7番・茂木和太選手に中前適時打が飛び出して追加点を挙げる。その後、得点にこそ結びつかなかったが、8番・照井希望選手にも左前安打が飛び出す。岩手県大会では控えに甘んじながら、甲子園緒戦でスタメンに名を連ねた照井選手の一打は、チームの士気をさらに高め



第95回全国高等学校野球選手権記念大会

## 夏の甲子園 激闘記

個々の力を結集し、  
ひたむきに戦った全4試合

2回表、1死から5番・多々野選手が右前安打。一塁に走者を置いた場面で6番・太田選手(写真)が、インコース高めめのストロートを右翼線に運ぶ。適時三塁打。花巻東が1点を先制する

るものだった。

「(ヒットは) 気持ちよかったです。とにかく『やってやろう』という思いで打席に立ちました」(照井選手)

対する彦根東(滋賀)のエースは左腕の平尾拓也選手。「大会注目」と言われたその左腕から2点を先制した速攻劇は、その後も訪れる猛攻のワンシーンに過ぎなかった。

2点リードで迎えた3回表には、イニングの先頭となった2番・千葉翔太選手がファールで粘りながら13球目に四球を選んで出塁した。走者が入れ替わって2死一塁となったが、5番多々野選手が135キロのストロートを右中間に運んで再びスコアボードに得点を刻んだ。さらに4回表は、7番茂木選手の左越え二塁打を皮切りに1番八木光巨選手の右前適時打などで2点を加える。4回表の攻撃を終え、8安打で5得点。前半からバットは火を噴いた。

その陰で、先発左腕の中里優介選手も完璧に近い立ち上がりを見せた。3回裏を投げ終えた時点で、9つのアウトのうち、奪った三振は5つ。球速も130キロ台後半を記録するなど、彦根東打線につけ入る隙を与えなかった。結局、5回途中まで投げた中里選手は4安打6奪三振の2失点と好投し



大事な緒戦の先発を任せられた左腕・中里選手は、3回裏までノーヒットピッチング。5回裏に2点を失うが、先発の役割を十分に担った



2 1



4 3



1 2回表1死二塁、6番・茂木選手が中前安打を放つて2点目。2 2番・千葉選手は、3安打1四球と4度の出塁で勝利に貢献。3 3回表2死二塁、5番・多々野選手の右中間を破る二塁打で3点目が入る。4 二塁側のアルプス席には、岩手からも多くの県民が駆けつけた。

た。試合後、中里選手は言った。「緊張することなく、リズムよく投げられた」

その言葉に対し、バッテリを組む捕手・山下駿人選手は「中里選手が、この夏一番のピッチングをしてくれた」と先発左腕を称えた。

### 走者が仕掛け、打者が打球を転がす

投打がかみ合う中、後半になっても勢いは止まらない。賑わうスコアボードにさらに彩りが加わったのは7回表だ。1番・八木選手、2番・千葉選手の連打で無死一、二塁とチャンスを築くと、3番・岸里亮佑選手の犠打で1死二、三塁と攻め立てる。ここで4番・山下選手は1ボール2ストライクと追い込まれたが、狙い通りのセカンドゴロを打ち、三塁走者の八木選手がホームを陥れた。その攻撃は、本校が目指す得点パターンの一つ。走者が仕掛け、打者が打球を転がす。「走者三塁での内野ゴロで得点」というスタイルは、本校の真骨頂とも言える。

隙のない小技のあとは、再び集中打での得点だ。8回表は、7番茂木選手のこの試合3本目となるヒットを起点に、途中出場の9番

細川椋樹選手からの3連打で3点を加えた。その裏、2番手の左腕・細川選手が3点を失うも、大勢に影響はない。終わってみれば、打線は15安打で9得点。圧倒的な攻撃力で、09年以来となる甲子園での1勝を手にした。ちなみに、甲子園での9得点は、岩手県勢最多得点記録だった。

試合後の佐々木洋監督は言った。「本来、長打が出るようなチームではないんですが、思いのほか打ってくれました。よく点数を取ってくれました」

だが、その言葉とは裏腹に、確かな手答えと、それを裏付けるだけの準備はしてきたという自負があった。

組み合わせ抽選会で彦根東との対戦が決まった時点から、相手の左腕対策に全精力を注いだ。思えば、佐々木監督は緒戦を前にこう言っていたものだ。

「相手の左投手はテイクバックが小さく、左腕が隠れた状態で打ってきます。攻撃では、打席の立ち位置やスイングの始動を考えて対応したいと思います。その中で、対投手だけではなく、いろいろな攻撃パターン、例えば小技などを絡めながらすべての力を使って相手を崩していきたいと思います」



## 試合直前まで チーム力を上げる 努力を怠らない

甲子園の戦いは、時間との勝負でもある。試合における一つひとつの動きは、地方大会以上に制限されるものだ。ベンチ入りする時、または試合後の移動は、過剰なほどに時間を区切られる中で慌しさを極める。試合中もまた、大会運営側が理想とする「試合時間2時間」という聖域の中で、これまた過剰なほどにスピーディーな試合運びが求められる。「あつという間に終わって何もできなかった」と、緒戦で敗れた初出場校がよく試合後に残す言葉は、「時間」との戦いを物語っている。

試合を迎えるまでの準備期間も同じことだ。緒戦ともなれば、なおさら時間との勝負になる。大阪特有の夏の暑さに慣れ、甲子園の雰囲気慣れ、そして対戦校をどこまで研究できるか。限られた時間の中で、それぞれの不安要素を少しでも減らすことが勝負のカギを握っていると言っても過言ではない。もちろん、条件は対戦校も同じだが、今大会の緒戦が大会6日目だったことは、本校にとって幸運だったとも言える。とりわけ、試

合に向けた準備をたいせつにし、試合直前までチーム力を上げる努力を怠らない本校にとって、大阪入りから緒戦までの時間は大きなアドバンテージとなり、追い風となった。準備期間での練習では、対戦校である彦根東のイメージを最大限に膨らませながら、左腕対策を徹底的に行なった。打撃練習で毎日のように投げ続けてくれたベンチ外の左腕投手たちの頑張りは見逃せない。その力投に応えるように、レギュラーメンバーも連日、真剣に打ち込んだ。緒戦で見せた猛打は、まさにチームが一つになる中で手にした結果だった。

## 緒戦で芽生えた 確かな自信

緒戦を終えた選手たちの顔は、どれも輝いていた。そして、そこには自信が漲っていた。打っては、夏の岩手県大会2回戦以来となる4番に座った山下選手が言う。

「今日は花巻東らしい野球ができたと思います」

5打数3安打1四球と、2番ながらも攻撃の軸となった千葉選手はこう言った。

「出塁するために何ができるの

## 2回戦

# Player's Comment

選手談話

### 中里優介選手

試合当日の朝に先発を言い渡されて少しは緊張しましたが、試合に入ったら一球一球、緊張がほぐれていきました。球場に包まれている感じで甲子園のマウンドは投げやすかった。

### 太田亮佑選手

一打席目の三塁打は、打った球は内角高めストレートでした。外角の球を待っていたんですけど、体がうまく反応して打つことができました。先制打になって嬉しかったです。

### 茂木和夫選手

監督さんから「緒戦が大事だぞ」と言われる中で、「ここまで来たら思い切りプレーするだけだ」と思ってプレーしました。そういうものが結果として表れた試合だったと思います。

### 佐々木洋監督

バント失敗などのミスがありましたが、それを帳消しにするぐらいによく打ってくれた。そして中里が大舞台の雰囲気になじめず、序盤をしっかり抑えてくれたのが大きかった。



### 花巻東

	打数	得点	安打	打点	1	2	3	4	5	6	7	8	9
△(二)	八木	5	2	3	2	三振	三振	…	右安	…	…	中安	中安
△(中)	千葉	4	0	3	3	遊安	…	四球	遊ゴ	…	…	左安	左安
△(左)	岸里	4	0	0	0	三振	…	中飛	左飛	…	…	三キ	一ゴ
(捕)	山下	5	1	1	1	…	三邪	三ゴ	…	左安	…	二ゴ	…
△(三)	多々野	5	1	2	1	…	右安	右2	…	投ゴ	…	三振	…
△(右)	太田	5	1	1	1	…	右3	遊ゴ	…	一併	…	…	二ゴ
(遊)	茂木	4	0	3	1	…	中安	…	左2	…	三直	…	左2
(一)	照井	3	1	1	0	…	左安	…	投失	…	…	…	…
△三	三原	1	1	0	0	…	…	…	…	…	…	…	投ゴ
△(投)	中里	2	1	0	0	…	左飛	…	投ゴ	…	…	…	…
△投	細川	2	1	1	0	…	…	…	…	…	…	…	遊安
計		40	9	15	9	残塁6	併殺2						

花巻東	9 = 0 2 1 2 0 0 1 3 0
彦根東	5 = 0 0 0 0 2 0 0 3 0

### 彦根東

	打数	得点	安打	打点	1	2	3	4	5	6	7	8	9
△(中)	川端	5	1	1	0	遊飛	…	…	二ゴ	右飛	…	…	中安
△(三)	谷沢	4	1	1	0	三振	…	…	中安	…	遊ゴ	…	遊ゴ
(遊)	山中	4	1	1	1	二ゴ	…	…	遊併	…	三振	…	左2
(右)	大沢	3	1	2	1	…	三振	…	…	右2	投安	…	左飛
△(一)	藤谷	3	0	0	0	…	四球	…	…	三振	三振	…	三振
(左)	田中	4	1	2	2	…	三振	…	…	左安	…	三振	右安
(捕)	武田	4	0	1	1	…	…	…	…	三振	…	右3	…
△(投)	平尾	2	0	1	0	…	…	…	…	遊ゴ	…	四球	…
投	田辺	0	0	0	0	…	…	…	…	…	…	…	…
打	鈴木	1	0	0	0	…	…	…	…	…	…	…	…
(二)	辻	3	0	0	0	…	…	…	…	…	…	…	…
打	増田	1	0	0	0	…	…	…	…	…	…	…	…
計		34	5	9	5	残塁5	併殺2						

	回数	打者	球数	安打	三振	四球	死球	失点	自責
△	中里	4	2/3	18	68	4	6	2	0
△	細川	○	4	1/3	19	67	5	5	0
△	平尾	●	7	2/3	38	142	15	6	1
△	田辺		1	1/3	4	18	0	3	0

◇盗塁 川端(8回) ◇失策 平尾(4回) 田中(8回) 八木(8回)  
 ◇けん制死 千葉(1回) 藤谷(2回) ◇走塁死 武田(5回) 茂木(8回)  
 ◇時間 2時間1分(開始13時31分, 終了15時32分) ◇審判 鈴木隆(球) 片淵, 山口, 西貝(望) ◇観衆 4万7000人  
 ◇天候 晴れ △は左投げまたは左打ち

1 2番手の細川選手は、8回裏に3失点するも最後は三者凡退に抑えてチームを勝利に導いた。  
 2 一塁側のベンチ前では笑顔が絶えなかった。3 ベンチとともに戦うスタンドの選手たち。4 投手陣を支え、打っては4番を担った捕手・山下選手。5 スタメン出場の8番・照井選手は、2回表に左前安打を放った。6 3安打2得点と活躍した1番・八木選手。7 細川選手は、打っては8回裏にショートへの内野安打を記録。8 校歌を歌い上げ、勝利をかみ締める選手たち。9 09年夏以来となる甲子園での勝利をつかんだ花巻東

かを常に考えました。(相手投手は)アウトコース中心の配球だったので、とにかく逆方向に打つことを意識しました。いつも通りのプレーができたと思います。僕は体が小さい。でも、小さくても小さいなりの仕事はあります」  
 また、途中出場となった三塁手の三原龍騎選手は、高ぶる気持ちを抑えながらこう言った。  
 「攻撃で言えば、相手の左投手に対して一人ひとりがそれぞれに工夫をしながら挑むことができた。自分たちの野球である『つなぐ野球』ができたと思います。緒戦に勝って、よい流れに乗れた

と思います」  
 個々の力がそれぞれの立場で発揮された緒戦は、チームの結束力をさらに高めた。  
 「能力的には全国でも十分に通用すると思います」  
 2年生ながら3安打を放ち、チームの勝利に貢献した茂木選手の言葉は、全部員の総意だったのかもしれない。  
 緒戦で芽生えた確かな自信。勝利を手にした選手たちの顔には、喜びが広がった。だが、それも一瞬。試合を終えた選手たちの視線は、すでに次なる戦いへ向けられていた。



3rd round

# 破り8強！ 強豪済美を センバツ準優勝の

3回戦 8月17日(土) 観衆46,000人

VS. 済美 (愛媛)

花巻東	2	0	1	0	0	0	0	0	0	4	7
済美	0	0	0	0	0	0	1	2	0	3	6



3対3の同点で迎えた延長10回表。3点を奪って、なおも攻め続ける花巻東は、2死一塁から8番・茂木選手が右中間へ三塁打を記録。一塁走者の小熊選手(写真)が一気にホームを陥れて、点差を4点に広げた

## 大会屈指の右腕、 安楽選手との勝負

大会屈指にして、世代最強右腕の呼び声が高かった済美の2年生・安楽智大選手は、本校との3回戦を目前にして落ち着き払っていた。「今日は勝利にこだわってやりたいと思っています。ストリートは的を絞られると思うので、変化球主体で投げたい。楽には勝てない相手だとは思いますが、冷静に初回のマウンドに上がれば、結果

はついてくると思います」

だが、その言葉とは裏腹に、豪腕・安楽選手は序盤からストリート主体のピッチングで押しつけてきた。その姿は、注目される中で顔を覗かせた「2年生」投手の気負いの表れだったかもしれない。いずれにせよ、安楽選手は焦っていた。そのピッチングを引き出したのは、プレーボールと同時に主導権を握った本校の初回の攻撃だったことは、紛れもない事実だろう。8月17日(土)の3回戦は、彦

根東との緒戦から中3日後に行なわれた。3回戦までの期間も、緒戦の勝利に浮かれることなく、「安楽選手対策」に集中した。練習では150kmに設定したバッティングマシンを打席から12m先の至近距離に置き、速球に対する体感を養った。

「全然、打球が飛びません……」そう言っ、練習期間中に苦しいを浮かべていたのは松田優作コーチだ。だが、そこでの準備は、確実に選手たちの力になってい

た。たとえ練習では打てなくても、速球に対する恐怖や不安は消えた。その感覚は、実際に豪腕を目の前にしても大きな力になったはずだ。

## 千葉選手に対する 「内野5人シフト」の奇策

1回表、甲子園球場がざわつく。1番・八木光巨選手が146kmのストリートを空振りし、三振に倒れた直後のことだ。2番・千葉翔太選手が打席に向かおうとする、済美の中堅手が駆け足でダイヤモンドに向かった。そのまま三遊間の前方で腰を落として構える。左翼手は左中間寄りに守備位置を変え、右翼手は右中間を詰めて守っている。それは試合前、済美の上甲正典監督が予告していた、千葉選手に対する奇策だった。だが、身長156cmの千葉選手に「長打力はないだろう」と分析した済美の「内野5人シフト」。その異様な光景にスタンドはざわついた。だが、千葉選手は冷静そのものだった。相手の仕掛けに動揺することもなく、いつものように打席で構える。奇策に対して真っ向か



## 第95回全国高等学校野球選手権記念大会 夏の甲子園 激闘記

個々の力を結集し、  
ひたむきに戦った全4試合

ら挑んだ千葉選手は、2ボール1ストライクからの4球目、安楽選手の143kmのストレートを強振した。打球が、わずかに空いた内野のスペースを狙いすましたかのように二遊間を襲う。通常ならセンター前ヒットと記録される打球だ。だが、公式記録は二塁へのヒット。千葉選手の一打に甲子園は沸き、本校のベンチにも「いける」という空気が流れた。

千葉選手が放った一撃は、済美ベンチ、そしてマウンドに立つ安楽選手に動揺をもたらした。3番・岸里亮佑選手が右前安打で続くと、4番・太田亮佑選手にも左前安打が飛び出し、3連打で満塁の好機が生まれた。動揺を隠し切れない安楽選手。5番・多々野将太選手は押し出しの死球となり、4者連続出塁で、まずは1点をもぎ取った。さらに、攻撃は続く。打席には、甲子園初出場の6番・小熊雄飛選手。試合前、小熊選手はこう言っていたものだ。

「コースに逆らわずにしっかりと振り抜きたい。そして、チャンスで打ちたい。自分たちの野球をやるだけです」

その言葉通り、左打席の小熊選手は安楽選手のボールを逆らわずに弾き返し、センターへの飛球を

①8回裏、挟殺プレーでピンチをしのぐ。  
 ②延長10回表、6番小熊選手の左前安打で1点を勝ち越す。③1回表、2点目のホームを踏む岸里選手。④延長10回表、左翼に犠牲フライを放つ7番・山下選手。  
 ⑤最後まで集中力を絶やさなかった選手たち。⑥済美の先発・安楽選手は、大会注目の本格右腕。⑦1回表、小熊選手の犠飛で2点目が入る。⑧5回途中から登板した中里選手。⑨3安打の2番・千葉選手。⑩2安打の3番・岸里選手。⑪4番・太田選手は、2安打1打点。⑫県大会を通じて初めて夏のマウンドに立った岸里選手



放つ。三塁走者の岸里選手が悠々とホームに還り、2点目が入った。緒戦に続く鮮やかな先制パンチ。注目右腕を擁する強豪校に対し、早々に主導権を握ったのはその後の展開に大きく影響した。3回表には、死球で出塁した岸里選手を一塁に置き、4番・太田選手が140kmのストロートを右翼線に運んで二塁打。岸里選手の俊足を生かした好走塁もあって1点を追加した。

### 先発河野選手が 強力打線を 無失点に抑える

躍動する攻撃陣。その一方で、先発を託された左腕の河野幹選手も強力打線を手玉に取る。1回裏は、野手の失策と死球で1死一、二塁とピンチを迎えたが、済美の4番・安楽選手から128kmのストロートで三振を奪うなど無失点で切り抜ける。

「変化球がコースに決まっていた。低めにボールがしっかりと集まっている」

河野選手は初回のピッチングで、一定の手答えを掴んだ。本来の姿である変化球主体の打たせて取るピッチングが冴え渡り、



第95回全国高等学校野球選手権記念大会  
夏の甲子園 激闘記

個々の力を結集し、  
ひたむきに戦った全4試合

その後も点を与えない。気づけば、3回裏を終わってノーヒットノーラン。4回裏に2安打を浴びてピンチを迎えたが、やはりここでも後続をサードゴロに仕留めて無失点に抑えた。河野選手の力投もまた、試合を優位に進めた原動力になった。

だが、さすがはセンバツの準優勝チームだ。終盤を迎えると、済美の打線に苦しめられる。7回裏に1失点。8回裏には、2番手の中里優介選手、3番手の細川稔樹選手がつかまり、2点を失って同点に追いつかれる。もつれた試合は延長戦に突入した。

3対3の同点で迎えた10回表。イニングの先頭は、2番の千葉選手だった。7回表の第4打席で右越え三塁打を放っていた千葉選手に対し、『内野5人シフト』を敷いていた済美は、10回表の第5打席で初めてその奇策を解除した。守備体系は内野4人の外野3人。いわゆる、通常の体系だ。だが、佐々木洋監督曰く「変幻自在に変わるチームの象徴」だった千葉選手は、ここでも状況の変化に動くことなく、持ち前の対応力で中前安打を放ってみせた。その会心の一打を皮切りに、3番・岸里選手の一塁線を抜ける二塁打、4

番・太田選手の敬遠による四球で無死満塁とチャンスは広がった。1死後、打席に立つのは6番・小熊選手。初球だった。148kmのスローボールを逆方向である左前に運び、1点を勝ち越した。さらに7番・山下駿人選手の犠飛で1点、8番・茂木和大選手の右中間を深々と破る適時三塁打で2点を加え、この回一気に4点を奪った。その裏、4番・安楽選手に3ラン本塁打を浴びて1点差まで詰め寄られるが、最後は4番手として登板していた岸里選手がマウンドを死守して勝利を掴んだ。

## 11安打で7点を奪った 攻撃力

試合を終えた選手たちの言葉は頼もしかった。2安打1打点の4番・太田選手が言う。

「昨年の秋、(大谷)翔平さん(現・北海道日本ハムファイターズ)がバッティング練習で投げてくれました。翔平さんのボールを実際に見てきたので、今日の試合も大丈夫だと思っていました。打つ自信はありました」

3安打と気を吐いた2番・千葉選手も同じ感覚があった。

「スピードボールには慣れてい

### 3回戦

## Player's Comment 選手談話

### 河野幹選手

甲子園では気迫を出して思い切り投げよう決めていました。周りからは「顔が緊張している」と言われましたが、一人ひとりのバッターに対して全力で投げることができました。

### 千葉翔太選手

4打席目(右翼越え三塁打)は、打席の前に監督さんから「思い切り引っ張ってこい」と言われたので、自分としても右方向に思い切り振ることだけを考えていました。

### 茂木和夫選手

中盤から相手バッテリーは変化球主体の配球に変えていたので、10回表の打席もその変化球、特にスライダーを待っていました。思った以上に打球が伸びてくれてよかったです。

### 佐々木洋監督

前半は思い通りの展開を見せてくれました。今夏のチームにスター選手はいません。上を目指せるチームではないかもしれませんが、とにかく目の前の試合に全力を注ぐだけです。

❶先発の河野選手は、済美打線を3回裏まで無安打に抑える。❷8回途中から登板した3番手の細川選手。❸「内野5人シフト」の奇策にも動じず、自身のプレーを貫いた千葉選手。一塁ベースコーチは主将・鹿糠選手(写真右)。❹激戦を制し、8強進出を決めた選手たち



花巻東	打数	得点	安打	打点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
△(二) 八木	5	0	0	0	三振	左飛	…	三振	…	…	…	二ゴ	…	二ゴ
△(中) 千葉	5	2	3	0	右安	…	三振	…	三ゴ	…	…	右3	…	…
△(左投) 岸里	4	3	2	0	右安	…	死球	…	三振	…	…	三振	…	右2
△(右) 太田	4	1	2	1	左安	…	右2	…	三振	…	…	三振	…	敬遠
△(三左) 多々野	3	0	0	1	死球	…	投ゴ	…	…	四球	…	三振	…	三振
△(一) 小熊	3	1	1	2	中権	…	三振	…	…	投ギ	…	三振	…	…
(捕) 山下	4	0	0	1	左飛	…	…	三振	…	…	…	…	…	右飛
(遊) 茂木	5	0	2	2	…	遊ゴ	…	左安	…	…	…	…	…	右飛
△(投) 河野	1	0	0	0	…	…	…	三振	…	…	…	…	…	…
△(投) 中里	1	0	0	0	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…
△(投) 細川	1	0	1	0	…	…	…	…	…	…	…	…	…	左安
△(三) 三原	1	0	0	0	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…
計	37	7	11	7	残塁8	併殺4								

花巻東	7	=	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4
済美	6	=	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	3	

済美	打数	得点	安打	打点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
(右) 山下	5	1	1	0	三振	…	三ゴ	…	三振	…	…	中安	遊ゴ	…
(遊) 林幹	5	1	1	0	三失	…	遊ゴ	…	中飛	…	…	二失	…	左安
走 上田	0	1	0	0	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…
△(二) 宇佐川	3	1	1	1	死球	…	右飛	…	…	三振	…	中安	…	四球
△(投) 安楽	5	1	1	3	三振	…	…	二飛	…	二直	…	二併	…	右本
(三) 太田	5	0	2	1	一ゴ	…	…	三振	…	…	…	遊安	…	三2
(左) 光同寺	4	0	1	0	…	三ゴ	…	中安	…	…	三振	四球	…	投ゴ
(一) 藤原	4	1	2	0	…	三振	…	左2	…	…	…	遊安	…	三失
一 盛田	1	0	0	0	…	…	…	…	…	…	…	…	…	三併
(中) 町田	2	0	1	1	…	…	…	四球	…	三ゴ	…	中安	…	投ギ
△(捕) 金子	3	0	0	0	…	…	…	三振	…	…	…	四球	…	遊飛
計	37	6	10	6	残塁7	併殺0								

	回数	打者	球数	安打	三振	四球	死球	失点	自責
△ 河野	4	0/3	18	89	2	5	2	1	0
△ 中里	3	11	40	3	4	0	0	3	1
△ 細川	1	2/3	7	26	2	0	1	0	0
△ 岸里	1	1/3	7	22	3	0	1	0	3
● 安楽	10	45	183	11	14	2	2	7	7

◇本塁打 安楽1号(3ラン=岸里) ◇盗塁 多々野(1回) ◇失策 多々野2(1回, 9回)八木(8回) ◇盗塁死 金子(5回) ◇走塁死 太田(花=3回)太田2(済=8回, 10回) ◇暴投 中里(7回) ◇時間 2時間37分(開始8時1分, 終了10時38分) ◇審判 長谷川(球)戸塚, 大槻, 乗金(塁) ◇観衆 4万6000人 ◇天候 晴れ △は左投げまたは左打ち

「まず」  
1学年上の先輩にあたる大谷選手のストロークを目の当たりにし、練習ではその速球を何度も実体験してきたことが、千葉選手の自信にもなっていた。  
この試合では15.2kmのストロークを記録した豪腕・安楽選手を攻略し、11安打で7点を奪った攻撃力は本物だった。済美戦を終えて、佐々木監督は言った。  
「安楽君には中盤からうまく変化球を使われて、なかなか追加点を挙げることはできませんでした。それでも、左打者が多い打線に対して力勝負で押してきましたところもあったので、『しっかり真つ直ぐを打とう』ということを選択したに言い続けていました。そして、『終盤の強さを見せてくれ』とも言っていました。今は目の前の試合、1試合1試合を全力で戦うだけです」  
緒戦に続く二ヶタ安打での勝利。センバツ準優勝の相手を破り、トーナメント戦において重要な要素でもある「勢い」という力も加えたチームに、周囲の期待は増すばかりだった。

# まさに逆転の花巻東! あきらめなさい心がつかんだ 大逆転

守備から  
攻撃のリズムを作る

菊池雄星選手（現・埼玉西武ライオンズ）らを擁した2009年。その年の夏、本校は甲子園4強を果たした。それ以来となる4強を懸けた一戦は、3回戦までの3試合で計35点を挙げ、強打で勝ち上がった。8月19日の準々決勝を控え、佐々木洋監督はこう言った。

「我々の野球は決して打ち勝つ

準々決勝 8月19日(月) 観衆24,000人

VS. 鳴門 (徳島)

花巻東	0	0	0	0	0	2	0	3	0	5
鳴門	0	0	0	0	0	3	0	0	1	4



野球ではありません。バッテリーがどれだけ抑えられるかが大きなカギを握っていると思います。鳴門戦は、3点以内に抑えられるかがポイントになる。そして、バッティングではシャープに振ることが大事になってくると思います。相手のピッチャーはチェンジアップがいい。左打者に対しては、スライダーとカーブをうまく使う印象もあります。明日(鳴門戦)は、低めにうまく出し入れする変化球の見極めが一つのカギになると思っています。とにかく、明日は原点に戻って、守備から攻撃のリズムを作るウチらしい展開にしたいですね」

彦根東との緒戦(2回戦)、済美との3回戦では攻撃陣が奮起して勝利を手にした。それでも、あくまでも指揮官は「守備から攻撃のリズムを作る」チームを求め、それが本校のスタイルの中心だと考える。それに加え、2013年のチームには対戦相手や試合展開を見極めながら、状況に応じた戦いができる強さもあると感じていた。言うなれば、試合巧者。

「野球のスタイルを变幻自在に変えられるのが、このチームの強みでもある」

佐々木監督は、そう言い続けた。

さらに、これまで本校野球部が積み重ねてきた経験値もまた、2013年夏の大きな力になっているとも語った。

2011年。本校は、大谷翔平選手(現・北海道日本ハムファイターズ)ら、当時2年生だった選手を中心に夏の甲子園に出場した。その時、1年生だったのが2013年の3年生たちだった。その中で、ベンチ入りメンバーたちとともに甲子園に帯同したのが、当時1年生だった千葉翔太選手・岸里亮佑選手・山下駿人選手、そして昨夏はベンチ外となったがチームの屋台骨を支え続けた泉澤直樹選手の4名だった。下級生の頃から甲子園の空気を感じ、そこでの戦いを肌で感じたメンバーたちが、2013年のチームの中心となった。佐々木監督が実感を込める。

「実際に甲子園でプレーしていないとは言え、2011年の夏、そして2012年のセンバツ大会も、昨年の3年生たちは経験しました。2013年夏の甲子園では、選手たちは宿舍の生活でもとにかく落ち着いていました。そういう姿を見てもやはり、経験というものは大きいと感じました」

甲子園の戦いを知り、その舞台



2



1



3



第95回全国高等学校野球選手権記念大会

## 夏の甲子園 激闘記

個々の力を結集し、  
ひたむきに戦った全4試合

■巧みなバットコントロールを見せた2番・千葉選手。■4つの四球を選ぶなど、チームにおける自分の役割を全うした千葉選手。■5打席すべてで出塁した千葉選手は、攻撃の起点となった



1



3 2



5 4



1前半を終えて両校無得点。インターバルの間、選手たちは集中力を高めて後半戦に向かった。2気迫をみなぎらせる選手たち。3先発の細川選手は、5回裏まで1安打無失点の好投。44回裏、インニングの先頭となった4番・太田選手がセンター前への打球で果敢に二塁を陥れる。5佐々木監督が「この夏、一番成長したのが山下選手」というように、鳴門との準々決勝でも3投手の持ち味を最大限に引き出し、勝利に貢献した捕手・山下選手

個々の力を結集し、  
ひたむきに戦った全4試合



両校無得点で迎えた6回表。3番・岸里選手が、野球人生初のセンターバックスクリーン弾を放つ

でチームは育つ。本校野球部にとって、甲子園の経験は大きな財産になっている。鳴門戦では、2013年の夏に手にした自信と、それまで積み重ねてきた経験値が一つの塊となった。

## 岸里選手の先制本塁打で 2点を先制

先発の細川稔樹選手は、持ち前の「サイドの角度」を生かして、

甲子園初先発ながら5回裏まで1安打無失点に抑えた。2年生左腕の好投に攻撃陣が奮起したのは6回表だ。2番・千葉選手がフルカウントまで粘る中、四球を選んで無死一塁。続く3番・岸里選手は、打席に入る前に考えていた。

「来た球をとにかく振り抜こう」  
1ボールからの2球目。岸里選手のバットが130kmのストリートをとらえる。打球は甲子園の空気を切り裂き、バックスクリーン

に向かって一直線に伸びていった。白球がスタンドに吸い込まれると、本校が陣取る三塁側のアルプス席から歓声が沸いた。先制の2点本塁打。岸里選手にとっては、高校通算32本目（公式戦3本目）の一発だった。

「打った球は外寄りの真っ直ぐでした。打った瞬間は（スタンドに入るとは）思いませんでしたが、何としても一本欲しい場面だったので打つことができてよかったです」（岸里選手）

だがその裏、前半まで力投していた細川選手が1死から連続四球のあとに適時打3本を浴びて逆転を許す。

「6回裏は少しだけ力んでしまいました」（細川選手）

終盤を迎えて1点のビハインド。だが、チームに焦りはなかった。

逆転の花巻東——。その伝統は、この試合でも健在だった。8回表、またしても2番・千葉選手の四球が得点の起点となる。3番・岸里選手、4番・太田亮佑選手が倒れて2死となるが、チャンスはまだ続いていた。走者二塁。ここで5番・多々野将太選手が打席に立つ。1ボール1ストライクからの3球目。「差し込まれた」打球が、一塁側に転がる。「ヤバイ……」。多々

野選手はそう思いながら、打球を目で追った。だが次の瞬間、奇跡が起こった。打球が一塁ベースに当たり、大きく跳ね上がった。ボールが外野に転々とする。その間、二塁走者の千葉選手がホームを陥れて同点となった。記録は右前安打だった。

「ラッキーなヒットでした。走者を選んできたことができてよかった」（多々野選手）

鳴門にしてみれば、その一打に「甲子園の魔物」を見ただろうか。甲子園ではよく、想定外の試合における敗因を「魔物」という言葉で表現することがある。予期せぬプレーやアクシデントに近い出来事による敗戦。または甲子園特有の空気に押し潰されてしまい、何もできずに敗れ去った場合など、試合後の監督や選手たちは「甲子園には魔物がいた」という。多くの場合、その言葉は敗者の弁だ。だが逆に、勝者にとつてそれは「好ましき来訪者」となる。魔物は、見方を変えれば『好』の要素を含んだエネルギーだ。それは勝者と敗者、いずれの場合にしても、時として試合の行方を左右する大きな力になることがある。多々野選手の幸運な一打は、6番・山下選手の左中間への勝ち越し二



1



2



3

塁打、さらに7番・茂木和太選手  
の右前適時打の呼び水となった。  
最後は、済美戦で好投した左腕・  
河野幹選手が鳴門打線を1失点に  
抑えて勝負あり。09年以來の夏4  
強進出を決めた。

### 全打席出塁。 攻撃のキーマン千葉選手

この試合、岸里選手の先制弾に  
始まり、多々野選手の幸運な同点  
打など、試合展開を左右するポイ  
ントはいくつかあった。その中で、  
攻撃のキーマンとなったのが2番  
の千葉選手だった。得点シーンは  
すべて、千葉選手の四球を起点に  
生まれたものだ。準々決勝の前に、  
千葉選手はこう言っていた。

「鳴門のピッチャーは四球が少  
ないので、逆に四球で出塁すれば  
相手に与えるダメージは大きいと  
思います。僕はいつも『出塁の仕  
方』を考えています。相手に『嫌  
だな』と思わせる中で、とにかく  
出塁することを意識しています。  
それが2番打者である僕の仕事で  
もあると思っています」

打席では、「体の前までしっか  
りとボールを呼び込んで、引きつ  
けて打つ」ことをいつも心がけて

# 準々決勝

## Player's Comment

### 選手談話

#### 細川稔樹選手

5回まで1安打に抑えましたが、自分の中では「打たれている」感覚が強かった。自分としては気持ち悪い試合というか……。前半は野手に助けられたという感じでした。

#### 岸里亮佑選手

ホームランは、まぐれです。正真正銘のバックスクリーンへの一発は、野球人生で初めてでした。チームの勝利に貢献できたかは分かりませんが、結果的に勝ってよかったです。

#### 多々野将太選手

8回表の同点打の場面は、打った瞬間は正直、完全にファーストゴロだと思いました。打球が抜けた瞬間は、自分でも信じられない感じでした。忘れられない打席になりました。

#### 佐々木洋監督

投げては細川選手がよく頑張ってくれた。打線は、緩急をうまく使う素晴らしいピッチャーに対して大振りせずにシャープに振っていた。選手たちの成長を感じた試合でした。



#### 花巻東

	打数	得点	安打	打点	1	2	3	4	5	6	7	8	9
△(二) 八木	5	0	0	0	遊ゴ	...	投ゴ	...	三振	...	遊ゴ	...	...
△(中) 千葉	1	2	1	0	四球	...	中安	...	...	四球	...	四球	...
△(左) 岸里	5	1	1	2	三振	...	左飛	...	...	中本	...	遊ゴ	...
△(右) 太田	5	0	1	0	一ゴ	...	...	...	中2	...	一ゴ	...	中飛 三振
△(三) 多々野	4	1	1	1	...	二ゴ	...	一ゴ	...	三振	...	右安	三振
(捕) 山下	4	1	1	1	...	遊ゴ	...	捕邪	...	左飛	...	中2	三振
(遊) 茂木	4	0	3	1	...	中安	...	二ゴ	...	...	中安	右安	...
△(一) 小熊	2	0	0	0	...	二ゴ	...	...	投ゴ	...	三ギ	死球	...
△三 三原	0	0	0	0	...	...	...	...	...	...	...	...	...
△(投) 細川	3	0	0	0	...	...	三振	...	投ゴ	...	左飛	...	...
△投 中里	1	0	0	0	...	...	...	...	...	...	...	中飛	...
△投 河野	0	0	0	0	...	...	...	...	...	...	...	...	...
計	34	5	8	5	残塁8	併殺0							

花巻東	5	=	0	0	0	0	0	0	2	0	3	0
鳴門	4	=	0	0	0	0	0	0	3	0	0	1

#### 鳴門

	打数	得点	安打	打点	1	2	3	4	5	6	7	8	9
△(二) 中野	3	1	0	0	遊ゴ	...	投ギ	...	...	三振	二飛	...	四球
△(中) 甲本	2	1	0	0	遊ゴ	...	遊ゴ	...	...	四球	死球	...	投ギ
(遊) 河野	3	1	0	0	二ゴ	...	...	投ゴ	...	四球	四球	...	投ゴ
(一) 伊勢	4	0	1	1	...	遊ゴ	...	遊ゴ	...	中安	中飛	...	四球
△(右左) 稲岡	5	1	2	2	...	二ゴ	...	右飛	...	左安	...	一ゴ	二安
(捕) 日下	4	0	1	0	...	四球	...	...	右安	二ゴ	...	二ゴ	三飛
(三) 松本	3	0	1	1	...	三振	...	...	一ゴ	左安	...	...	四球
(投) 板東	4	0	0	0	...	...	一飛	...	中飛	投ゴ	...	...	三ゴ
△(左) 鳴川	2	0	0	0	...	...	死球	...	右飛	...	中飛	...	...
右 前川	0	0	0	0	...	...	...	...	...	...	...	...	四球
計	30	4	5	4	残塁11	併殺0							

	回数	打者	球数	安打	三振	四球	死球	失点	自責
△ 細川	6	2/3	30	112	4	2	4	2	3
△ 中里	○	1	1/3	7	34	0	0	3	0
△ 河野	1	5	15	1	0	1	0	0	1
板東	●	9	40	163	8	5	4	1	5

◇本塁打 岸里1号(2ラン=板東) ◇失策 小熊(8回)中里(8回)  
 ◇走塁死 太田(4回)伊勢(6回)前川(9回) ◇暴投 板東(8回)  
 ◇時間 2時間29分(開始8時00分, 終了10時29分) ◇審判 小山(球)金丸, 土井, 西貝(塁) ◇観衆 2万4000人 ◇天候 晴れ △は左投げまたは左打ち

18回表, 5点目のホームを踏む山下選手。28回表, 5番・多々野選手の一塁線を襲った打球が幸運な適時打となり同点。38回表, 勝ち越しの二塁打を放った6番・山下選手。4ピンチにも笑顔があふれたチーム。5最後は3番手の河野選手が締める。609年夏以来の4強進出を決めた選手たち。78回裏, 貴重な適時打を放った7番・茂木選手

いる。鳴門戦の第一打席は、13球粘って四球を選んだ。第2打席の中前安打を挟んで、3打席目以降も3つの四球をもぎ取って全打席で出塁した。そんな中、相手投手に一人で41球を投げさせた。彦根東戦でも同様に何度もファールで粘りながら四球を選んだ場面があった。それらは、千葉選手の高度なバッティング技術を物語る。鳴門戦を終え、千葉選手の打率は7割。出塁率にいたっては、3試合で驚異の8割を誇った。まさに脅威の2番打者。その存在は、試合を重ねるごとに大きくなり、準々決勝でも大きな光を放った。



# 「甲子園4強、

# 最後までひたむきに

# 戦い続けた選手たち

準決勝 8月21日(水) 観衆40,000人

VS. **延岡学園**  
(宮崎)

花巻東	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
延岡学園	0	0	0	0	0	2	0	0	×	2



初の夏決勝を前に、惜しくも敗れた花巻東。試合後は、悔しさを滲ませながら一塁側アルプスに陣取る応援団にあいさつした

## 俺たちが 野球部の歴史を変える

準決勝を翌日に控えた8月20日（火）。チームは、兵庫県明石市にあるグラウンドで大一番にそなえて調整を行なった。休養も兼ねたその日の練習では、準決勝までの戦いを振り返りながら、一つひとつのプレーを確認した。グラウンドに広がる顔は、どれも明るい。同時に、「俺たちが野球部の歴史を変えるんだ」という強い思いが、選手たちの顔には滲んでいた。

本校にとって、夏の甲子園の最高成績はベスト4。その2009年に並んだチームが目指すものは、本校初の決勝進出であり、その先にある深紅の大優勝旗だった。歴史を塗り変える一戦を前に、佐々木洋監督は言った。

「選手たちの動きやコンディションはよいと思います。明日（準決勝）も、一人ひとりが役割をしっかり担ってくれればと思っています。その中で勝負のカギを握っているのは攻撃陣。相手投手陣をいかに打てるか。岸里選手などはバッティングの状態が上がってきていますし、明日は特に1番の八木選手あたりに期待したいです

ね。守りを固めて攻撃に移るスタイルがモットーではありますが、明日は打ち負けない戦いができればと思います」

迎えた準決勝当日。試合直前の選手たちの顔は、やはり気迫が漲っていた。不動のリードオフマンとして全試合で1番を担う八木光巨選手は、準決勝に懸ける思いをこう語った。

「これまでチームに貢献できていないので、今日の試合は何としても出塁したい。最後まで集中力を切らさずにやりたいと思います」

## 好調な打線は影を潜めた

13時30分。延岡学園（宮崎）との準決勝が幕を開けた。1回表。先頭打者の八木選手は、フルカウントまで粘った。だが、最後は変化球を打たされてセカンドゴロに倒れる。その後、3番・岸里亮佑選手が四球で出塁するも、後続が倒れて無得点に終わった。序盤3イニングスはノーヒット。準々決勝までの好調な打線は影を潜めた。チーム初安打が飛び出したのは4回表だ。1死から3番・岸里選手が右前安打を放つ。だが、この試合では「つなぐ」攻撃が生ま

れない。やはり後続が倒れて無得点に終わった。

一方、本校先発の中里優介選手は、序盤から粘り強いピッチングを続けていた。味方の失策によって得点圏に走者を進められても「決定打」を与えずに、4回裏ま



5回表、インングの先頭となった6番・山下選手がチーム2安打目となる中前安打を放って出塁する。だが、後続が倒れて無得点。試合は膠着状態のまま、後半戦に突入した

## 第95回全国高等学校野球選手権記念大会 夏の甲子園 激闘記

個々の力を結集し、  
ひたむきに戦った全4試合

手前への犠打。それが相手投手の失策を誘い、無死一、二塁とチャンスは拡大した。わずかに勝利の風が本校に流れる。だが、8番・小熊雄飛選手が犠打で走者を進めることができずに1死。さらに9番・中里選手、1番・八木選手が

ことができないう中、逆に延岡学園にワンチャンスをもにされる。

## 「魔」のイニングと なった6回裏

6回裏。2死二塁とピンチを迎えると、相手の5番打者に右前適時打を浴びて1点を先制された。さらに、ホームへの返球間に打者走者の二塁進塁を許して再び2死二塁となり、6番打者に左中間を破る適時三塁打を浴びて追加点を奪われる。3本の長短打で2失点。あつという間の出来事だった。その後、「打たれても冷静に投げよう」と気持ちを切り替えて投げ続けた中里選手は相手に点を与えなかった。6回裏の2点が、唯一の失点。中里選手にとっては、まさに「魔」のイニングとなった。

「逆転の花巻東」を信じる本校のアルプス席。もちろん、一塁側ベンチの選手たちも自分たちの力を信じ続けた。2番の千葉翔太選手は言う。

「後半勝負が僕たちの野球。リードされても、チーム全員で『ここからだぞ』と言っていました」

だが、思いとは裏腹にチャンスすら生まれぬ。失点後の7回表は三者凡退。8回表は、2死から

1番・八木選手が中前安打を放って出塁するが、千葉選手がセカンドゴロに打ち取られて無得点に終わる。そして、迎えた9回表も3番・岸里選手、4番・太田亮佑選手が簡単に打ち取られて2死。5番・多々野将太選手が粘りを見せて四球を選ぶが、最後は6番・山下選手が三振に倒れて万事休す。結局、チームとして放ったヒットは3本だけ。最後までスコアボードに得点を刻むことができなかった。

新たな扉を開く挑戦は、静かに幕を下した。

試合後、控え室に戻った選手たちは大粒の涙をこぼした。その姿を見ながら、インタビュールのお立ち台に登った佐々木監督は言葉を振り絞ってこう言った。

「選手に伸び伸びとやらせてあげることができませんでした。打線は、相手投手にインコースをうまく使われる中、相手バッテリーにかわされてしまいました。2009年の成績（ベスト4）を越えられなかったのは、監督の責任です」

準々決勝まで攻撃のキーマンとしてチームを支えた2番の千葉選手は、敗れた直後に過呼吸になるほどに泣き崩れた。声を震わせて試合を振り返る姿が、悔しさを物語っていた。

「ファールで粘って出塁するの  
が僕の仕事ですが、自分がやりた  
かったことが最後にできなかった  
た。これまでやってきたことに悔  
いはありませんが、今日は野球人  
生の中で一番悔しい」

準々決勝まで出塁率8割を誇っ  
た千葉選手が、準決勝では4度の  
打席で一度も出塁できなかった。  
チームメイトが83cmのバットを使  
う中で、千葉選手だけはただ一人、  
みんなより1cm短いバットを使っ  
た。それは自分の役割を知り、自  
らの個性を最大限に生かしたいと  
いう思いの表れだった。82cmのバ  
ットで自分の立ち位置を確立させ  
た。そして、「花巻東の2番打者」  
として躍動し続けた。だが、準決  
勝では、その光は失われた。千葉  
選手の最大の武器である高度なバ  
ットコントロールは最後まで見る  
ことができなかった。そして、準々  
決勝まで得点シーンを何度も演出  
してきた一つの「個」を失ったチ  
ームは、敗れた。

だが、本校野球部のモットーで  
ある「岩手から日本一」という思  
いは、最後のワンプレーまで示し  
てくれたのではないだろうか。諦  
めずに、ひた向きに、最後まで戦  
い続けた選手たちは多くの感動を  
もたらしてくれた。



■1 3回表まで無安打。チーム初安打が飛び出したのは4回表。3番・岸里選手がストレートをとらえて右前安打を記録した。■2 8回表、2死から1番・八木選手が中前安打を放ってチャンスを作るが得点には至らなかった。■3 主将・鹿糠選手(写真左から3番目)を中心に、勝利を信じ続けた選手たち。■4 アルプス席の大応援団も勝利を目指して声援を送った



1



3



2

## 第95回全国高等学校野球選手権記念大会 夏の甲子園 激闘記

個々の力を結集し、  
ひたむきに戦った全4試合

### 小さな個を結集させて 大きな「和」となった

甲子園4強——。新たな部史を築くことはできなかったが、その成績は十分に誇れる。  
新チームが発足して間もない12年秋は、岩手県大会総戦で敗れた。その敗戦を機に、チームは「和」をテーマにした。超高校級と呼ばれる

れるようなスーパースターはいない。それでも、個々の力を結集した先に本物の力があることを彼らは信じ続けた。かつて、本校の松田優作コーチはこう言っていたものだ。

「3年生は負けん気の強さがある代です。その象徴が、三原選手（龍騎）です。ベンチには欠かすことができない存在で、常に強い気持ちを持って、時にはチームメイトを叱りながらチーム全体をグッと締めてくれる。そういう3年生に、2年生の選手たちがうまく融合して成長していった感じですね」

その先に、甲子園での輝きが待っていた。  
2013年夏、彼らは一つひとつの小さな個を結集させて大きな「和」となった。そして、部史に新たな1ページを加えた。その熱い夏の物語は、決して忘れない。



4

■12番・千葉選手は、主将・鹿糠選手と流石裕之部長に支えられながら大粒の涙を流した。■9回表、意地の四球を選んだ5番・多々野選手。■8回裏、代打で出場した武田選手。■2失点完投の先発・中里選手

第95回 全国高等学校野球選手権記念大会  
全試合打撃成績

◎投手成績

順位	投手	学年	試合数	打数	得点	安打	打点	二塁打	三塁打	本塁打	三振	四死球	犠打	盗塁	失策	打率
1(左)	岸里亮佑	③	4	16	4	4	2	1	0	1	4	2	1	0	0	.250
2(捕)	山下駿人	③	4	17	2	3	3	1	0	0	4	0	1	0	0	.176
3(三)	多々野将太	③	4	15	2	3	3	1	0	0	6	3	0	1	3	.200
4(控)	鹿糠俊輝	③														
5	三原龍騎	③	3	2	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	.000
6(遊)	茂木和大	②	4	15	0	8	4	2	1	0	0	0	1	0	0	.533
7(控)	阿部友哉	③														
8(中)	千葉翔太	③	4	14	4	7	3	0	1	0	1	5	0	0	0	.500
9(右)	太田亮佑	②	4	18	2	4	2	2	1	0	6	1	0	0	0	.222
10(控)	河野 幹	③	2	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	.000
11	中里優介	③	4	6	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	.000
12	照井希望	③	1	3	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	.333
13	小林勇大	③														
14(二)	八木光亘	②	4	19	2	4	2	0	0	0	6	0	0	0	4	.211
15(控)	武田大生	③	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	.000
16(一)	小熊雄飛	②	3	8	1	1	2	0	0	0	3	1	3	0	1	.125
17(投)	細川稔樹	②	4	6	1	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	.333
18(控)	遠藤 諒	②														
チーム合計			4	141	21	37	21	7	3	1	37	12	7	1	9	.262

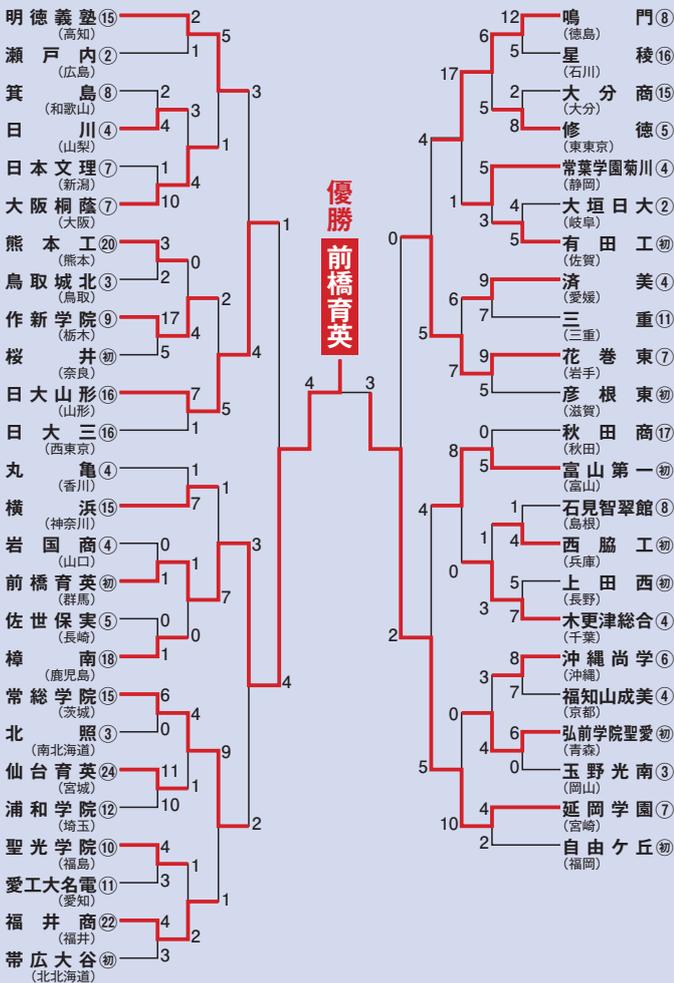
◎打撃成績

選手	試合数	回数	打者	被安打	奪三振	与四死球	失点	自責点	防務率
中里	4	16	64	12	14	6	8	6	3.38
細川	4	13 2/3	60	12	7	8	6	4	2.63
河野	2	5	23	3	5	4	0	0	0.00
岸里	1	1 1/3	7	3	0	1	3	3	20.25
チーム合計	1	36	154	30	26	19	17	13	3.25

◎甲子園での成績

- 2回戦 ○9対5 彦根東
- 3回戦 ○7対6 済美
- 準々決勝 ○5対4 鳴門
- 準決勝 ●0対2 延岡学園

◎組み合わせ



準決勝

Player's Comment

選手談話

鹿糠俊輝選手

2009年の成績と並んで、みんなには見えないところでプレッシャーがあったかもしれません。それでも、最後まで全員野球ができた。チームの団結力は大きかったと思います。

三原龍騎選手

勝つ自信はあった。歴史を塗り変えたいという思いの中で、勝利だけを信じていました。でも、結果的に守備での大きなミスもない中で敗れた。正直、力負けという感じでした。

阿部友哉選手

千葉選手のプレースタイルは花巻東を象徴した形。僕と身長がほぼ同じで、いつも行動をともしてきた千葉選手に対しては、「お疲れさま」「ありがとう」という思いだけでした。

佐々木洋監督

2009年の成績を越えたいという一心で戦いましたが…。とにかく悔しいです。中里選手はよく投げてくださいましたが、準決勝だけは最後まで自分たちの野球ができませんでした。



花巻東

	打数	得点	安打	打点	1	2	3	4	5	6	7	8	9
△(二) 八木	4	0	1	0	二ゴ	...	二ゴ	...	三振	...	...	中安	...
△(中) 千葉	4	0	0	0	三ゴ	...	...	遊ゴ	...	投ゴ	...	二ゴ	...
△(左) 岸里	3	0	1	0	四球	...	...	右安	...	捕邪	...	...	中飛
△(右) 太田	4	0	0	0	一ゴ	...	...	遊ゴ	...	三振	...	...	三振
△(三) 多々野	3	0	0	0	一ゴ	...	...	右飛	...	...	三振	...	四球
(捕) 山下	4	0	1	0	...	...	三振	...	中安	...	投ゴ	...	三振
(遊) 茂木	2	0	0	0	...	...	中飛	...	...	...	...	...	二ゴ
(一) 小熊	3	0	0	0	...	...	遊ゴ	...	捕ゴ	...	...	...	三振
△(投) 中里	2	0	0	0	...	...	三振	...	三振	...	...	...	...
△(打) 武田	1	0	0	0	...	...	...	...	...	...	...	...	遊ゴ
△(投) 細川	0	0	0	0	...	...	...	...	...	...	...	...	...
計	30	0	3	0	...	...	...	...	...	...	...	...	...

花巻東	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
延岡学園	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	X

延岡学園

	打数	得点	安打	打点	1	2	3	4	5	6	7	8	9
△(二) 梶原	4	0	0	0	遊ゴ	...	...	中飛	...	投ゴ	...	二ゴ	...
△三 渡会	0	0	0	0	...	...	...	...	...	...	...	...	...
△(遊) 松元	4	0	2	0	一ゴ	...	...	二安	...	...	中飛	...	中安
(中) 坂元	3	1	1	0	遊ゴ	...	...	遊ゴ	...	中安	...	...	投キ
(右) 岩重	3	0	0	0	...	...	遊ゴ	...	中飛	...	遊飛	...	四球
(左) 浜田	4	1	1	1	...	...	三振	...	遊ゴ	...	右安	...	左飛
△(一) 田中	3	0	1	1	...	...	二失	...	左飛	...	左3	...	...
△(三二) 薄田	2	0	0	0	...	...	四球	...	...	三振	遊ゴ	...	...
(捕) 柳瀬	3	0	1	0	...	...	三振	...	...	右安	...	遊ゴ	...
△(投) 横瀬	2	0	0	0	...	...	二ゴ	...	...	...	...	...	三振
計	28	2	6	2	...	...	...	...	...	...	...	...	...

	回数	打者	球数	安打	三振	四球	死球	失点	自責
△ 中里	7	28	100	5	4	1	0	2	2
△ 細川	1	4	16	1	0	1	0	0	0
△ 横瀬	9	33	125	3	9	2	0	0	0

- ◇盗塁 坂元(6回) ◇失策 八木2(2回,3回)横瀬(5回)多々野(5回)
- ◇走塁死 柳瀬(5回)松元(8回) ◇暴投 中里(5回)
- ◇ボーク 細川(8回) ◇試合時間 1時間38分(開始13時30分,終了15時08分)
- ◇審判 堅田(球)宅間,若林,三宅(塁) ◇観衆 4万人 ◇天候 晴れ △は左投げまたは左打ち

# 4年ぶりの国体出場

## 最後まで、笑顔で

# 全カプレーを貫いた花巻東ナイン

序盤から失点を重ねて苦しい展開。それでも、最後までチーム丸となつて戦い続けた



	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
鳴門	3	1	0	5	0	0	0	1	1	11
花巻東	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1

- 投手：中里優介選手・河野幹選手・岸里亮佑選手・細川稔樹選手
- 捕手：山下駿人選手
- 二塁打：岸里亮佑選手・多々野将太選手

3年生にとっては最後の公式戦。  
大差での敗戦となったが、  
試合後は各選手の顔に笑顔が弾けた

夏の空気を含んだ青空が、彼らを優しく包み込んでいた。

舞台は東京都八王子市民球場。夏の甲子園4強を受けて、本校は2009年以来2度目となる国民体育大会に出場した。

9月30日(月)の緒戦。対するは、甲子園の準々決勝で激突した鳴門(徳島)だった。

鳴門にしてみれば、1点差で敗れた夏の借りを返す、言わば「リベンジの場」だったかもしれない。その勢いに、本校の投手陣は序盤から飲み込まれた。

1回表、1死二塁から適時打二塁打を浴びると、その後も五番打者の適時打、六番打者の犠飛で追加点を奪われる。2回表にも1点を失った本校は、早々に4点のリードを許した。さらに4回表には長短打5本を集められて5失点。終盤にも小刻みに追加点を奪われ、終わってみれば17安打で11点を失った。夏の甲子園ではそれぞれの持ち味を發揮して好投した中里優介選手・河野幹選手・岸里亮佑選手、そして2年生の細川稔樹選手。彼ら4本の矢は、国体に限って言えば一本の大きな矢になることはできなかった。

一方の打線もまた、夏の快進撃を支えた「つなぎの攻撃」、あるいは破壊力を加えた集中打を見せることができなかった。得点シーンは、2回裏に訪れた。五番・多々野将太選手の左中間二塁打を起点に1死三塁と攻めると、七番・太田亮佑選手の内野ゴロで1点を奪った。だが、攻撃の「魅せ場」はその一度だけ。三番・岸里選手が二塁打を含む2安打を放って意地を見せたが、チーム全体で放った安打は、わ

ずかに3本だけ。1対1の完敗だった。

それでも、試合後の選手たちは青空同様に晴れやかな表情を浮かべた。試合でも、劣勢が続いたとは言え、笑顔で全力プレーを貫いた。この試合では無安打に終わったが、グラウンドでは誰よりも多くの声援を受けた二番・中堅手の千葉翔太選手は言う。

「岩手から日本一を目指した高校時代。試合には敗れましたが、最後までチーム、そして自分のプレーは貫けたと思います」

また、4回表の途中から出場し、千葉選手と左中間コンビを形成した阿部友哉選手はこう言う。

「僕と身長がほぼ一緒の千葉選手とは、1年生の時からずっと一緒に練習して、互いに競い合いながら成長することができました。宿舎でもほとんど一緒に過ごしていました。そんな千葉選手と、最後は一緒に外野を守ることができて嬉しかったです」

阿部選手は、甲子園では控えに回り、三塁コーチスボックスに立ち続けた。それだけに、最高の仲間と、ともにグラウンドに立つことができたこの試合は忘れられない思い出になった。「やりきった」。各選手の心は満たされた。

試合後、佐々木洋監督はこんな言葉で締めた。「昨年は県大会1回戦で負けながら、選手たちはここまでよく辛抱してやってくれました。国体まで連れてきてもらって、彼らには本当に感謝したいと思います」



北海道日本ハムファイターズのユニフォームに身を包み、新たな挑戦を誓う岸里選手。プロでは野手一本で勝負する



新入団選手の発表記者会見では、緊張ながらも笑顔浮かべた岸里選手。一軍での活躍が待ち遠しい

## Topics

# 岸里亮祐選手、 日本ハムファイターズに 入団決定!

——2013年秋のプロ野球ドラフト会議。指名を待ち続けた時の心境を教えてください。

「今までやってきたことを信じて、指名を待っていました。名前が挙がった瞬間は、とにかく嬉しかったです」

——北海道日本ハムファイターズからドラフト7位指名。

「(大谷)翔平さんと同じチームだったので、指名を受けたその夜に、『これからよろしくお願いします』という電話を翔平さんに入れました。テレビでドラフトの様子を見ていたという翔平さんからは、同じチームでプレーすることに対して『運命的なものがあるね』という言葉いただきました。また、多くの方々から祝福の電話をいただきました。支えられて今があることを改めて実感しました」

——背番号は『67』。

「球団からいただいた背番号です。その番号を、いずれは自分の力で“若い番号”にできるように、これから努力をしていきたいと思っています」

——プロでは、どんな選手になっていきたいですか？

「プロでは外野一本で勝負します。自分の持ち味である走力とバットティングをさらに磨き上げ、1年目からどんどんアピールしていきたい。1日でも早く一軍に上がって、いずれは翔平さんと一緒に外野を守れるような選手になりたいと思います。プロ野球でプレーすることに対して、今ワクワク感があります。でも、何よりも感じるのは上の世界でプレーする責任感です。これから長い野球人生にするために、そしてこれまで支えてくれた方々に恩返しをするためにも、ケガをしないようにしっかりと体作りをして、地道に努力をしていきたい。その先で、確かな結果を残していきたいと思っています」

# 甲子園への道

2012年秋の岩手県大会〜2013年夏の岩手県大会

新チームで臨んだ2012年秋の県大会で、まさかの緒戦敗退。

不安と戸惑いのスタートの中、

選手たちでミーティングを繰り返し、

チームのテーマを「和」と定めた。

その「和」を強く大きくするため

自力で行動を起こし、個人の力を磨いていった。

試練の冬を乗り切り、

春の大会では、確実な手答えを感じた。

そして迎えた夏の県大会、

ついに待ち望んでいた

甲子園の切符を手に入れた。



2012年

# 秋

## 岩手県大会



2012年9月14日、花巻市営球場で行なわれた秋季県大会1回戦。チームは一関を相手に、最後は延長10回の末に敗れた

『接戦に弱く、逆転できない野球』  
となった秋の戦い

追悔に満ちたひとつの敗戦が、物語の始まりだった。

夏の無念を晴らすべく、2012年の秋。新チームとなった花巻東は、秋季県大会を勝ち上がり、順当に岩手県大会へ駒を進めた。だが、迎えた県大会緒戦。開幕試

### 第65回秋季東北地区高等学校野球岩手県大会 花巻地区予選

#### ■一回戦 対花巻南高等学校

8月30日(木) 11時55分～ 花巻球場

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
花巻南	0	0	0	1	0	0	0			1
花巻東	0	0	0	0	3	6	X			9

(7回コールド)

花巻東 投手：菊池風雅選手・細川稔樹選手  
捕手：山下駿人選手

#### ■準決勝戦 対花北青雲高等学校

9月2日(日) 13時40分～ 花巻球場

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
花北青雲	0	0	0	0	0	0	0			0
花巻東	3	2	0	2	0	0	X			7

(7回コールド)

花巻東 投手：中里優介選手  
捕手：山下駿人選手

#### ■決勝 対花巻農業高等学校

9月5日(水) 12時20分～ 花巻球場

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
花巻農業	0	0	0	1	0	0				1
花巻東	2	1	3	2	0	3				11

(6回コールド)

花巻東 投手：吉田匠選手・細川稔樹選手・中里優介選手  
捕手：山下駿人選手

### 第65回秋季東北地区高等学校野球岩手県大会

#### ■一回戦 対一関第一高等学校

9月14日(金) 10時00分～ 花巻球場

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
一関一	0	0	0	0	0	0	1	0	0	4
花巻東	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1

(延長10回)

花巻東 投手：中里優介選手・菊池風雅選手・細川稔樹選手  
捕手：山下駿人選手

合となった一関一との一戦で、もやの苦戦を強いられる。ヒットを重ねながらも決定打が生まれな。1対1の同点のまま、試合は延長戦に突入した。延長10回表。守る花巻東は、内野の失策も絡みながら大量4点を奪われた。その裏、1点を返したが反撃は続かず、最後は力尽きた。

緒戦敗退——。強さの象徴である「すみれ色」が、その時ばかりは霞んだ。

佐々木洋監督が秋の記憶を掘り下げる。

「秋の新チームも、ある程度は結果を残してくれるだろう、やってくるだろう」と思っていました。前チームでベンチ入りをしてきた選手もいましたし、公式戦で勝ちながら強くなってもらいたい

という思いがありました。だから、秋の戦いも楽しみでした。でも、現実には県大会で緒戦敗退。負けた時は、放心状態になりました」

花巻東には、先輩たちから受け継がれてきた部訓がある。

『接戦に強く、逆転できる野球』

これまで、『逆転の花巻東』と言われてきた所以はそこにある。どれだけ劣勢になったとしても、たとえヒット数が相手より下回っていたとしても、最後は必ず勝利を手にする。その粘り強さこそが、花巻東の真骨頂だ。だが、秋の戦いに関しては、その「強み」が失われていた。佐々木監督が言う。

「ウチは『逆転の花巻東』というネーミングを持っています。たまたま逆転するのではなく、チームプランとして『接戦に強く、逆

転できる』を常に追い求めています。秋は、決定打に欠く中で終盤同点、そして延長の末に敗れました。それまでなら、そういうゲームで負けることはなかった。しかも、最後は自分たちのミス(失策)で負けました。『接戦に弱く、逆転できない野球』が、秋の戦いにはありました」

また、佐々木監督は「今となっては、情けなかった」とも語る。それは、試合に敗れた結果に対する言葉ではない。自分自身の言葉に対する追悔だ。

「試合に負けた直後、私は情けないことに選手たちにこう言いました。『お前たち、これまで何をしていたんだ』と。選手たちに、敗因の矢印を向けてしまいました。正直、年内はそういう気持ち

でした。でも、年が明けてからは気づきました。悪かったのは、選手たちではない。私の方だったのだ、と」

秋の敗戦の約2ヶ月前。大谷翔平選手(現・北海道日本ハムファイターズ)らを擁した前チームは、夏の岩手県大会決勝で敗れた。甲子園出場を逃した責任と無念さが、佐々木監督の心に居座り続けた。

「勝ちたいという思いは毎年同じですが、2012年夏の敗戦は私の中では大きかった。物語は続いていて、菊池雄星選手(現・埼玉西武ライオンズ)らがいた09年に日本一を逃してしまったという思いがある中で、12年夏のチームは再び日本一を狙えるチームだと思っていました。160kmのスピ

2013年

# 春

## 岩手県大会

ードを出した大谷選手もいる中で、彼らを全国の舞台上に導いてあげられなかった。決勝で敗れ、その思いを強くした。それだけに、私自身が新チームになってからも夏の敗戦を引きずっていた部分がありました。今振り返ると、本当に選手たちには申し訳ないことをしたと思っています」

### 「チームのテーマを『和』と定め、『個』を磨いたオフシーズン

一方、選手たちは秋の緒戦敗退をこう受け止めていた。主将の鹿糠俊輝選手が振り返る。

「新チームとして初めて迎えた県大会で緒戦負けを喫して、正直『これから大丈夫かな?』という思いになりました」

不安や戸惑い。その感情を振り払うかのように、選手たちは来る日も来る日もミーティングを繰り返した。選手間で意見をぶつけ合う中で、それぞれが自身の足下を見つめ直した。花巻東には、学校全体に「立腰教育」が根付いている。立腰、つまりは自力で行動を起こすこと、あるいは自らの意思と行動力で道を切り開いていくこと。さらにその精神の下では、心が磨かれ、集中力や粘り強さが育まれる。秋の敗戦を機に、野球部の選手たちは「立腰」の精神に立ち返り、それぞれが「個」を磨いていった。

その中で、彼らはチームのテーマを「和」と定めた。本来、「和」という言葉には「仲良くして、争いごとがなく穏やかにまとまる」

という意味もある。だが、チームが求めた「和」は、互いの力をたいていせつにし、そして認め合ったその力を一つの大きな集合体にする事だった。スーパースターはいない。個々の力は小さいかもしれない。それでも、一つひとつの力を結集することで新たな道を切り開こうとした。

オフシーズンの練習は、鹿糠選手曰く「本当に長かった……」。だが、逆にその時間はそれぞれが『個』を磨く上で貴重な時間となり、チームの結束力をより深めるものになった。そして、選手たちが長い時間をかけて変化を求め、中、佐々木監督は追悔の念を振り払い、失った時間を必死で取り戻そうとした。一日一日をかみ締めながら、選手とともに練習に明け

暮れた。

常にチームのことを第一に考え、鹿糠選手とともに選手のまとめ役を担った三原龍騎選手は言う。

「振り返ってみれば、僕らは監督さんという時間が長かったと思います。監督さんは、秋に緒戦で負けた僕らを最後まで見捨てずに指導してくれました」

ひと冬は、チームに新たな力をもたらした。練習試合が解禁となる3月を迎えると、彼らは関東遠征に向かった。そこでの姿に、佐々木監督は一つの光を見た。

「冬場の練習があったとは言え、正直なところ、春を迎えるまでは手探り状態でした。でも、実力的には『弱い』と思っていましたが、何とかチームを立て直したいと思っていました。そういう中で、春

先の関東遠征に出かけてみたら、チームが変わっていました。練習

試合の一発目となった慶応高校(神奈川)との試合では、思わぬ

大勝。グラウンドを使った練習があまりできていなかった中で、そういう試合展開になるとは思ってもいなかったもので、『あれ?』と驚きました。その後も、20数試合して4敗ぐらいしかしない。固定

メンバーではなく、まだチームとしてはグチャグチャの状態にもかかわらず、試合での『出来』が秋とは明らかに違いました。正直、関東遠征を終えた時点でも、強いのか、弱いのか、はつきりとしたものは見えていませんでしたが、選手たちの成長は感じました。特にピッチャー陣が大きく成長していました」

### 盛岡大附属に敗れるも

### 夏に向けて手答えを感じた

### 春季県大会

迎えた2013年の春季大会。県大会緒戦は、盛岡三との対戦だった。まず主導権を握ったのは花巻東だった。1回裏、1番・八木光巨選手の四球を起点に2死二塁

と攻めると、4番・山下駿人選手の右翼線二塁打で1点を奪う。4回表にソロアーチで同点とされるが、6回裏には1死満塁から6番・多々野将太選手の中越え二塁打が飛び出して2点を勝ち越した。さらに、8回裏にも多々野選手の適時二塁打で1点。9回表に、3番手の中里優介選手が盛岡三打線に

捕まり2点を失うが、最後は2死1点差で勝利。前年秋には見られなかった「接戦で勝ち抜く力」が、その試合にはあった。2回戦で水沢を6対1で退けたチームは、準々決勝に進んだ。相手は、盛岡大附。春季大会前に行なわれたセンバツ大会に出場して

第60回春季東北地区高等学校野球岩手県大会花巻地区予選

■一回戦 対大迫高等学校

5月6日(月) 11時30分～

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
大迫	0	0	0	0	0	0	0			0
花巻東	2	0	1	1	3	2	X			9

花巻東 投手：河野幹選手 (7回コールド)  
捕手：山下駿人選手・照井希望選手

■二回戦 対遠野高等学校

5月9日(木) 14時00分～

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
遠野	0	0	0	0	0	0	0			0
花巻東	0	0	0	1	6	1	X			8

花巻東 投手：細川稔樹選手・中里優介選手 (7回コールド)  
捕手：山下駿人選手



2013年の春季県大会、準々決勝で敗れたが、ひと冬越えた選手たちは大きな成長を見せていた  
写真提供/岩手日報社

第60回春季東北地区高等学校野球岩手県大会

■一回戦 対盛岡高等学校

5月23日(木) 9時00分～ 二戸市大平球場

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
盛岡三	0	0	0	1	0	0	0	0	2	3
花巻東	1	0	0	0	0	2	0	1	X	4

花巻東 投手：吉田巧選手・河野幹選手・中里優介選手  
捕手：山下駿人選手

■二回戦 対水沢高等学校

5月25日(土) 9時00分～ 二戸市大平球場

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
水沢	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
花巻東	0	0	4	0	0	0	2	0	X	6

花巻東 投手：中里優介選手  
捕手：山下駿人選手

■三回戦 対盛岡大学附属高等学校

5月26日(木) 10時00分～ 二戸市大平球場

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
花巻東	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
盛大附	1	0	0	1	0	0	0	0	X	2

花巻東 投手：中里優介選手・細川稔樹選手・岸里亮佑選手  
捕手：山下駿人選手

いた県内のライバル校だ。1回裏、先発の中里選手が犠飛で1点を失うと、4回裏には適時打を食らって2点目を献上した。一方の打線は、前半5回を終わって、わずかに1安打。後半も連打が生まれないうちで、結局は4安打無得点に終わった。スコアは、0対2。春の戦いは準々決勝で終わった。だが、指揮官は敗戦の中にも一つの希望

を見出し出した。佐々木監督が春を振り返る。

「結果的に準々決勝で負けましたが、夏に向けては手答えを感じた大会になりました。もちろん、敗れた現実を考えれば、盛岡大附属さんは強い、ちよつとも間違っていたら大差がついていたかもしれない。そんな思いもありましたが、ウチのチームもそこそこは戦えるのかな、と。そんな実感はありました」

「手答え」の根拠は、どこにあったのか。指揮官が言葉をつなげる。「盛岡大附戦で2番手として登板した細川(稔樹)選手を中心とした投手陣が、ある程度は計算が立つようになったこと。あるいは、茂木(和太)選手や八木(光巨)選手といった2年生が動き出し、安定したプレーが見られるようになったこと。それらは春の収穫でした。また、守備から乱れることがなくなった。前年秋は守備から崩れて負けました。そのことを考えると、ひと冬越えて守備力が上がったことも収穫でした」

夏に攻め上げるか、夏に向けての課題

明確な課題が見つかったことも

よかった。4安打無得点に終わった盛岡大附戦を受け、夏に向けては攻撃力の強化がポイントになった。佐々木監督の言葉だ。

「あくまでも、練習の中心はデフエンスの強化。『守りを固めて攻撃につなげる』野球は、花巻東の基本的なスタイルです。トーナメントにおいては堅い野球、負けない野球がたいせつです。そのために、デフエンスに力を入れてきた現実があります。ただ、一昨年(2012年)あたりから『打てなければ勝てない』と意識が変わっていた中で、特に春の県大会が終わってからはバッティング練習に時間を割くようになりました。いかに攻撃力を上げるか。夏に攻め上げる課題はつきりとしていました」

花巻東の練習は、まず初めに「大事なこと」からスタートする。要するに、チームが必要とするものを最優先に練習は進んでいく。これまでは、守備や走塁の練習が最優先され、基本的に打撃から練習が始まることはなかった。だが春を経て、チームは攻撃力を高める練習から始めることが多くなった。夏までの道のりを佐々木監督はこう振り返る。

「攻撃力には、『得点能力』と『打

つ力(打撃力)』、その二つの要素があります。ウチは、その両方を大事にしています。たとえば、打つ力があっても、その力が得点に絡まない、あるいはつながらない試合はよくあるものです。逆に、相手よりヒット数が少なくても試合に勝つことがあります。ウチの場合は、後者の試合展開が多い。また、両校のヒット数が同じなのに、結果的にはコールドゲームで勝つ試合もあります。要するに、ヒット数が大事なのではなく、いかにヒットや掴んだチャンスを得点に結びつけることができるかが重要なことです。それは得点能力ということになるのですが、そこはこれまでチームとして求めてきたものであり、極めてきた部分だと思っています。春の時点で得点能力はあった。それに加えて、夏に向けては打つ力、振る力を求めました。得点能力と打つ力を並行して磨いていきました。結果的に、夏の大会ではその2つが上手く絡み合ったと思います。スター選手がいらない中で勝ち上がることでできた要因のひとつは、その攻撃力だったと言えます。それまでにはない花巻東の野球が、夏の大会にはありました」

第95回 全国高等学校野球選手権記念岩手大会

■二回戦 対金ヶ崎高等学校

7月15日(月) 14時00分～  
岩手県営野球場

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
花巻東	1	2	0	1	1	4	9			18
金ヶ崎	1	0	0	0	0	0				1

花巻東 投手：河野幹選手 (7回コールド)  
捕手：山下駿人選手・遠藤諒選手

■三回戦 対久慈高等学校

7月17日(水) 12時30分～  
八幡平市総合運動公園野球場

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
久慈	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
花巻東	0	0	3	1	1	1	0	0	0	6

花巻東 投手：中里優介選手  
捕手：山下駿人選手

■四回戦 対花巻南高等学校

7月20日(土) 12時30分～  
金ヶ崎町森山総合公園野球場

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
花巻東	0	0	2	4	1	0	0	2		9
花巻南	0	0	0	0	0	1	0	0		1

花巻東 投手：河野幹選手 (8回コールド)  
捕手：山下駿人選手

■準々決勝 対久慈工業高等学校

7月21日(日) 12時30分～  
岩手県営運動公園

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
花巻東	3	0	0	0	2	3	0			8
久慈工	1	0	0	0	0	0	0			1

花巻東 投手：佐々木竜次選手 (7回コールド)  
捕手：山下駿人選手

■準決勝 対盛岡第四高等学校

7月24日(水) 12時30分～  
岩手県営野球場

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
盛岡四	2	0	0	1	0	0	0	0	0	3
花巻東	1	0	0	1	0	0	0	2	x	4

花巻東 投手：中里優介選手・細川稔樹選手  
捕手：山下駿人選手

■決勝 対盛岡大学附属高等学校

7月26日(金) 10時00分～  
岩手県営野球場

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
盛岡大附	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
花巻東	0	0	0	0	2	3	0	0	x	5

花巻東 投手：細川稔樹選手  
捕手：山下駿人選手

2013年  
**夏**  
岩手県大会

県大会のポイントとなった  
盛岡四との準決勝

2013年、7月。甲子園出場を  
かけた夏の岩手大会が始まった。  
春のベスト8を受けてシードで

の出場となったチームは、緒戦(2  
回戦)で金ヶ崎を18対1(7回コ  
ールド)で下す。3回戦は久慈との  
一戦。序盤に3点を先制すると、  
その後も磨き上げられた攻撃力で  
追加点を挙げ、6対2で勝利した。



2013年夏。金ヶ崎戦のコールドゲームから始まった県大会では、順当に勝ち名乗りをあげていった 写真提供/岩手日報社

花巻南との4回戦は、3回表に7  
番・山下駿人選手の中前適時打  
などで2点を先制。4回表には3番・  
岸里亮佑選手、4番・太田亮佑選  
手、6番・武田大生選手の適時打  
などで4点を加える。終わってみ  
れば、13安打で9得点。8回コー  
ルドで試合を決めた。久慈工との  
準々決勝でも、打線の勢いは止ま  
らない。1回表に3点を先制する  
と、5回表には5番・多々野将太  
選手の内野ゴロの間に1点、さら  
に6番・山下選手の適時二塁打で  
1点、6回表には4安打を集中さ  
せて3点を奪った。投げたのは、背  
番号20をつけた右横手投げの佐々  
木竜次選手が久慈工打線を5安打  
1失点に抑える快投。8対1の7  
回コールドで順調に勝ち上がった。  
準決勝は、総合力の高い盛岡四  
と対した。のちに佐々木監督が  
「県大会のポイントになった試  
合」と振り返ったように、序盤か  
ら息詰まる試合展開となった。先  
発の中里優介選手は序盤から制球  
が定まらなかった。1回表は連続  
四球で走者を溜めると、5番打者  
に2点適時打を浴びた。4回表も  
四球絡みで1失点。結局、5安打  
4四球で3点を失い、4回途中で



盛岡四との準決勝。8回裏、1番・八木選手、2番・千葉選手が出塁後、4番・太田選手(写真が右前へ)逆転打を放つ 写真提供/岩手日報社

2年生左腕の細川稔樹選手にマウンドを譲った。反撃に転じたい打線も、1回裏と4回裏に1点ずつを加えたが、盛岡四のエース・長鈴悠平選手を打ち崩すまでには至らなかった。終盤8回表を終わって1点のビハインド。花巻東のベンチに暗雲が立ち込める。

2番・千葉翔太選手はショートゴロ。だが、その打球が相手遊撃手の送球ミス誘い、無死二・三塁とチャンスは広がった。1死後、打席に4番・太田亮佑選手が立つ。1ボール2ストライクと追い込まれる中、太田選手は高めのボールを強引に打ち返した。気迫の一打が、右前にポトリと落ちる。2人が生還して一気に逆転に成功した。最後は、4回途中から登板し

ていた細川選手が締めてゲームセット。終盤の逆転劇で3年連続の決勝進出を決めた。佐々木監督が準決勝を語る。「厳しい試合となった準決勝をものにして、チームはさらに強くなりました。相手チームの長鈴君は素晴らしい投手でした。そのエースを中心に、盛岡四さんは本当に良いチームでした。ただ、そんなチームとの対戦でもトーナメ

ントにおいては『負けないこと』が大事。終盤までもつれる中、選手たちはよく逆転してくれました。秋の時点では『接戦に弱く、逆転できない』チームが、その試合を経て『接戦に強く、逆転できる』チームになった。選手たちの成長を感じつつ、その後の戦いに向けても手答えを感じました。トーナメントにおいては、1・2試合は必ず苦しい試合があるものです。そのゲームをものにしてこそ、本当に強いチームになっていく。改めてそんなことを感じた試合でもありました」

### 決勝の相手は、春の県大会、前年夏の決勝でも敗れた盛岡大附

甲子園まで、あと1勝。その勝利を懸けた決勝の相手は、春の県大会で敗れ、前年夏の決勝でも敗れた盛岡大附だった。試合前、佐々木監督の胸中は複雑だった。

「2012年夏の決勝と同じカード。ベンチも同じ三塁側。試合前は複雑でしたね」

一瞬だったが、1年前の悪夢が頭を過った。だが、指揮官にはもう一つの思いがあった。「選手たちは、よくここまで来

てくれたな……」  
その力を、最後まで信じようと思った。

決勝が始まる直前、チームはベンチ裏の控え室でミーティングをした。佐々木監督が打ち明ける。

「実はその時、控え室を真っ暗な状態にして、ある映像を選手たちと一緒に見たんです。雄星選手が、ある方を通じて作ってくれた気持ちを書いた立派な映像です。ベンチ入りできなかった3年生部員も含め、全員でその映像を見ました」

選手の中には、その映像を見て涙を流す者もいた。佐々木監督もまた涙を流した。

「新チーム結成からずっと怒りっぱなしの彼らに、初めて私は涙を見せました」

涙を流し、「この試合で勝てば、また怒れる。もう少しだけ怒らせてくれ」、そんな言葉も掛けながら、選手全員とハイタッチをして決勝に向かった。

主将の鹿糠選手は言う。

「試合前に、監督さんから熱い言葉をもらいました。そして、ベンチ入りできなかった3年生もハイタッチでグラウンドに送り出してくれて、『いよいよ決勝戦だな』と気持ちが引き締まりました」



第95回全国高等学校野球選手権岩手大会を制した花巻東。2年ぶり7回目となる夏の甲子園出場を決めて歓喜に沸く 写真提供/岩手日報社

## 勝因を挙げるとすれば 細川選手のピッチングだった

1回表、先発の細川稔樹選手が1点を失った。だが、チームが揺らぐことはなかった。反撃に転じたのは5回裏だ。1死から6番・山下駿人選手が左前安打で出塁。盗塁を決めて得点圏に進んだ。2死二塁。ここで8番・茂木和大選手が左中間を破る適時二塁打を放って、まずは同点とした。なおも走者を二塁に置いた場面で、9番・細川選手が左翼線に落ちる幸運なヒットを放って一気に勝ち越しに成功した。流れは完全に花巻東だ。6回裏には、無死満塁から5番・多々野選手の犠飛で1点、さらに8番・茂木選手の2点適時打が飛び出し、点差を4点に広げた。

マウンドに立つ細川選手は、落ち着いていた。2回以降は、盛岡大附の強力打線をわずか3安打に封じ込める。終わってみれば、失点は初回の1点のみ。5安打1失点で完投した。

5対1。岩手県大会を制した花巻東は、夏7回目の甲子園出場を決めた。

佐々木監督が決勝を振り返る。「選手たちは落ち着いていまし

たね。打線は信じられないぐらいに打ってくれました。そんな中、勝因を挙げるとすれば細川選手のピッチングだったと思います。実は、夏に盛岡大附さんとの対戦があるとなれば、その試合での先発は『細川選手でいこう』と春の時点で決めていました。春季県大会の準々決勝（盛岡大附戦）で、細川選手は2番手としてマウンドに立ちました。その試合、私は細川選手に課題を出していました。いかに打者のタイミングをずらすピッチングができるか。そのために、球持ちを長くしたり、遅くしたり、あるいはフォームのスピードを変えてみたり、いろんな工夫をしながら投げるように伝えていました。結果的に、細川選手は相手打線をしっかりと抑えた。そのピッチング（4回途中から8回途中まで投げて2安打無失点）を受けて、夏は『細川選手でいく』と決めました。決勝では、その期待にみごとに応えてくれました。また、そのピッチングを最大限に引き出してくれたのが、捕手の山下（駿人）選手でした。夏の岩手県大会を通じて一番の成長を見せてくれた山下選手は、本当に大きかったと思います」

2年ぶりに訪れた夏の歓喜。岩

手大会決勝を終えた直後の佐々木監督の言葉が印象的だった。

「ここまで長かったですし、苦しかった。私自身、昨年(2012年)夏の負けを引きずってしまつて、秋からの新チームに迷惑をかけた部分がありました。本当に申し訳なかった。冬場は、そんな意味でも、こうして甲子園出場を決めてくれた選手たちには感謝したいと思っています。守りを固めて攻撃につなげる野球を貫く中、選手たちはよく守り、よく打ってくれました。そして最後まで粘り強く戦ってくれました。その姿が頼もしく思えて、優勝した瞬間は思わず涙が出ました」

## 苦しさを知って、初めて楽しくプレーができる

技術の向上は、試合の結果を見れば明らかだった。それに加え、2013年の夏には精神面での大きな成長があった。

佐々木監督は言う。

「精神面の指導においては、日々の練習が大事だと思っています。いかにプレッシャーを背負って練習をするか。いざ公式戦になって『伸び伸びやれよ』と言っても、日頃から厳しい環境に身を置き、プレッシャーをかけた練習ができていなければ、本番で伸び伸びプレーすることはできないと思います。本当の厳しさが身に染みしてい

るからこそ、伸び伸びとプレーができる。苦しさを知って初めて、楽しくプレーができる。私はそう思っています。また、野球を通して選手たちに学んでもらいたいのは、相手を知ること、相手の気持ちを理解することです。野球は相手のあるスポーツです。試合においては、相手を知ること、たいせつな要素になります。例えば、バッターなら自分の都合だけでバッターボックスに立ってはいけません。要するに、相手ピッチャーの気持ちや傾向を頭に入れながら、バッターボックスに立たなければいけないと思います。あるいは、相手のピッチャーが投げた変化球をキャッチャーがパスボール(後

逸)したとします。そうなれば、高い確率で次は変化球を投げづらくなる。ならば、『次は真っ直ぐで勝負してくるのではないかと』と、予測がつく。そのように、相手の動きや気持ちを考えてプレーすることは野球においてたいせつなことです。ですから、日頃の練習では『相手考えたプレー』を私は選手たちに求めます。結局は、その思考や行動が日常生活での『相手思いやる』気持ちにつながると思います。学校では、先生がどういう気持ちで話しているのか。また、親に怒られたのなら、親がどういう心理で怒ったのか。常に相手の立場になって物事を考える。そういう人間になつてもらいたいし、高校の3年間では野球や勉強の知識だけを学ぶのではなく、生きていくための知恵や考える力を身につけて欲しいと思っています。ひいてはその思考が、野球において大きな力となるものです」

たといプロ野球選手になつたとしても、野球を辞めてからの人生の方が長い。ですから、2013年の夏を戦つた選手たちにとつても、これからの人生が大事になってくる。どういう人生を歩むのか。プロ野球でプレーする者、大学で野球を続ける者、またはトレーナーを目指す者、医者を目指す者。それぞれに道は違います。でも、たとえどんな道に進んだとしても、すべての選手たちにそれぞれの目標に向かって頑張ってもらいたい。本当の意味での公式戦は、これから長く続きます。『人生の公式戦』は後戻りできないわけですから、その時々を精一杯の力で頑張ってもらいたいと思っています」

その願いは、いつの時代も変わらない。2013年のメンバーたちも、その教えの中で技術を磨き、人間力を養つた。そして、彼らは高い技術と強い精神力を備えたそれぞれの『個』を結集させ、最後に大きな勲章を手にした。

あきらめない勇気さえあれば、いつか夢は実現する――。

それは、花巻東のキャッチフレーズの一つ。その言葉を実践した彼らは、甲子園で再び、大きなストーリーを描くことになる。



盛岡大附との決勝で先発した左腕・細川選手は5安打1失点の完投。優勝に大きく貢献した 写真提供/岩手日報社



決勝戦、1点を追う5回裏、2死二塁から8番・茂木選手が左中間を深々と破る同点二塁打を放つ 写真提供/岩手日報社



# 2013年夏の軌跡は、 花巻東にとって 大きな財産になった。

## 佐々木洋監督インタビュー



——2年ぶり7回目の出場となった2013年夏の甲子園を中心に伺います。試合もさることながら、昨夏の甲子園では大会期間中の練習もまた充実した取り組みができたような気がします。大会前、そして大会期間中もそれほど報道陣の数が多くなかった。それは、これまでの甲子園とは明らかに違った風景だったと思います。

「たとえば、菊池雄星選手らがいた09年、または大谷翔平選手らがいた11年の夏は、それぞれに注目される選手がいて常にピリピリした状態で戦いました。大会期間中の2時間の練習も、ファンや報道陣などが押し寄せて熱狂する中、落ち着いて練習ができなかった。でも、昨夏のチームにはスター選手がいなかったの、特に緒戦を迎えるまでは練習を見に来る報道陣も少なく、落ち着いて練習ができました。試合になっても、戦いやすかったことは事実です」

——緒戦（2回戦）は大会6日目。調整という意味でも、じっくりと時間をかけて緒戦を迎えられた、その日程は追い風になったと思います。

「昨夏は、特に暑かった。緒戦まで時間が空いたのは、暑さに慣れるという意味でもよかったですし、試合に臨む準備もしっかりとできたと思います」

試合が終わるまでは  
勝った気には  
なれませんでした

——緒戦は彦根東（滋賀）との対戦。

「試合前にスタンドを見渡すと、甲子園が真っ赤に染まっていてビックリしました。要するに、赤をスクールカラーとする彦根東の応援が凄かったです。その中で、先発の中里（優介）選手が相手打線を3回裏までノーヒットに抑えました。ただ、4回裏に初ヒットを許すと、我々のベンチの後ろからも大声援が聞こえる。『どういこと？』と思いました。ただ、相手チームの応援が甲子園を覆っていたのです

2002年の監督就任以来、数々の甲子園を経験してきた佐々木監督にとっても、13年夏の甲子園は思い出深いものになった。「昨夏の経験を今後の力にしていきたい」

ね。球場全体が彦根東の大応援団という感じの中で戦っていました。野球はグラウンドの上だけの勝負ではないということ、改めて感じたゲームでもありました」

——とは言え、序盤から得点を重ねたチームは、常に主導権を握りました。中盤以降は粘る初出場の彦根東に5点を奪われましたが、圧倒的な攻撃力で打ち勝ちました。

「正直、監督の立場で言えば緒戦を迎えるにあたってプレッシャーを感じていました。過去の甲子園では春夏通算で8勝させてもらっていましたが、その後の甲子園では勝利を手にすることができていませんでした。要するに、雄星選手がマウンドに上がった09年しか勝っていなかった。周りからは『雄星選手がいたから勝ったのではないか』と言われ……。監督としては、そんなプレッシャーも感じていました。ですから、彦根東戦はいくら優位な展開になっても試合が終わるまでは勝った気にはなれませんでした。ただ、選手たちはよくやってくれました。中里選手は、岩手県大会準決勝で状態があまりよくなかった。そういう中で甲子園でのマウンドでした。甲子園緒戦の先発を任せるとは言え、試合前は不安でしかありませんでした。どちらかと言うと、性格が優しいタイプ。大舞台に飲み込まれてしまうのではないかと心配したほどです。だからこそ、初回が大事だと思っていました。そうしたら、序盤3回をしつかりと抑えてベンチに帰って来てくれました。5回裏に突如として崩れましたが、そ

れは私の中では想定内のこと。ですから、その試合は中里選手を交代させるタイミングさえ間違えないようにしようと考えていました」

——15安打で9得点を挙げた攻撃陣の出来はどう感じましたか？

「左打者が多い打線の中で、相手のピッチャーは左投手。しかも、球の出所が分かりづらい左腕でした。それでも、ウチの左打者は左投手を苦にすることなくよく打ってくれました。彦根東戦は、バントや守備のミスが結構ありました。でも、そのミスを帳消しにするぐらいに彼らは打ってくれました。試合後、9得点が甲子園での塁勢最多得点タイ記録だったと聞かされましたが、もちろん試合中はそんなことを意識することはありませんでした。先に言ってくれば、あと1点取ったのに（苦笑）。それは冗談ですが、まずは緒戦を勝たなければいけないと思っていた中で9点を奪った攻撃力には、正直ビックリしました」

### 千葉選手に対する

### 『内野5人シフト』も、

### 試合前から警戒していた

### ことだった

——続く3回戦は、愛媛県代表の済美戦。相手の先発エースは豪腕・安楽智大選手でした。

「緒戦を勝って、周りは『次は済美とやればいいじゃん！』という雰囲気でしたが、

常にプレッシャーを背負いながら練習に励む。逆に公式戦では、「選手たちに伸び伸びとプレーさせてあげたい」という佐々木監督



「私自身は正直『安楽選手では、たまらない』  
と  
思  
っ  
て  
い  
ま  
し  
た  
（  
苦  
笑  
）  
。でも、その一  
方  
で『打てる』という自信もありました」  
——その根拠は？

「それまでの安楽選手のピッチングを見ると、左打者に対してスライダーを投げるのが苦手な傾向がありました。投げづらいとなれば、ストレートに頼るしかない。しかも、そのストレートは、ほぼインコースにしか投げてこない。ですから、選手たちには「ストレートを狙って、バッターボックスから離れて立ちインコースを狙おう」という指示を出していました。その結果、初回から安楽選手を攻略することができました」

——2番千葉翔太選手の二塁内野安打を含む左打者の3連続ヒットなどで2点を奪った、1回表の攻撃はみごとでした。

「よく打って点を取ってくれました。千葉選手に対する『内野5人シフト』は、試合前からマスコミの噂が流れて警戒をしていました。千葉選手には『今日はインコースを思い切り引っ張って、ホームランを打て！』と試合前に言っていました」

——投げては、先発左腕の河野幹選手が3回までノーヒットピッチング。4回裏に2安打を許すも、結局は無失点で5回裏に中里選手にマウンドを譲りました。

「河野選手は、県大会の準決勝、決勝でも投げていないピッチャーでした。試合前の囲み取材で『先発・河野選手』と言ったから、多くの記者がビックリしていました。河野選手は、もともと変化球がよい投手。

相手の済美打線考えた時、変化球の方が効果的だと思っ  
て  
先  
発  
を  
決  
め  
ま  
し  
た  
。でも、正直なところ、河野選手は打者一巡までしか考えていませんでした。試合後、点を取られないまま降板した河野選手について、記者からは『継投のタイミングが早かったんじゃないか』ということ言われましたが、ベンチからすれば良いタイミングでの



監督自身「緒戦を迎えるにあたってプレッシャーを感じていた」という。その重圧から解き放たれ、チームを甲子園4強に導いた

鳴門に対して、  
横の角度を持つ  
細川選手しかないと思っ  
て  
い  
ま  
し  
た

——130キロ台後半のボールを投げる中里選手、横の角度を生かした細川稔樹選手、変

継投だったと思っ  
て  
い  
ま  
す  
。崩れて失点し  
て  
か  
ら  
の  
交  
代  
で  
は、河野選手自身も可愛  
う  
だ  
と  
思  
っ  
て  
い  
ま  
し  
た  
し、その後のことを  
考  
え  
る  
と  
ベ  
ス  
ト  
な  
交  
代  
だ  
っ  
た  
と  
思  
い  
ま  
す  
。  
い  
ず  
れ  
に  
せ  
よ、どの試合でも言えること  
で  
し  
た  
が、一人の投手が9回まで投げ切るよ  
う  
な  
投  
手  
陣  
で  
は  
な  
か  
っ  
た  
の  
で、継投が一つ  
の  
ポ  
イ  
ン  
ト  
で  
し  
た

化球を主体とした長身の河野選手。その左腕3投手に加えて、右上手投げの岸里亮佑選手も控える。それぞれにタイプが違う高い水準を誇った投手陣がいたことは、昨夏の一ム  
の  
大  
き  
な  
武  
器  
で  
し  
た  
。  
「それだけに、昨年のチームはマウンドに立つ順番と交代のタイミングが重要でした。ただ、準々決勝の強打を誇る鳴門（徳

島）戦だけは、投手陣の継投は考えませんでした。3回戦まで打ち勝ってきた鳴門に対して、横の角度を持つ細川選手しかないと思っ  
て  
い  
ま  
し  
た  
。ですから、細川選手を引っ張るだけ引っ張りたくいと試合前は考えていました」

——鳴門戦。岸里選手の2ラン本塁打で先制した直後の6回裏に、細川選手が3失点で逆転を許しました。それでも投手交代はなかった。「もう少し細川選手で勝負したいと思っ  
ま  
し  
た  
。でも、7回裏に2アウトから連続四死球でピンチを迎えて『代えないといけない』と思っ  
ま  
し  
た

——2番手の中里選手が8回裏まで好投する中、最後は河野選手が締めて1点差で逃げ切りました。

「変化球投手、しかも球速がない河野選手は先発タイプです。『抑え』で出すという発想は、そもそも私の中にはありませんでした。でも、9回裏に中里選手が連続四球を出した時点で河野選手を出すしかありませんでした。でも、マウンドに立った河野選手は、吠えながら投げて相手に向かっていく姿勢を前面に出してくれた。普段は無口な男が『これだけの姿を見せるんだ……』と新たな発見がありましたし、感動しました。そして、彼が頼もしく思えました。河野選手の気迫が相手打線を飲み込み、その姿にウチの守備陣も『絶対に守ってやるぞ』という雰囲気になりました。準々決勝は、終盤8回に逆転した攻撃陣の粘りを感じながらも、投手陣の存在を改めて感じた試合でした」

## とにかく1試合1試合、目の前の試合を戦いました

——夏の甲子園での4強進出は、09年以来2度目でした。延岡学園（宮崎）との準決勝を迎えるにあたっては、どんな心境でしたか？

「09年と同じベスト4まで来た、あるいは『あと1つ勝てば決勝だ』ということとは、あまり考えませんでした。昨年夏は、とにかく1試合1試合、目の前の試合を戦いました。『勝ったら階段を登っていた』『気分いたら頂点に立っていた』『下を見たら、いつの間にか相手がいなかった』。そういう戦いをしようと、選手たちにも常に言っていましたし、甲子園でもベスト8やベスト4という意識はありませんでした」

——準決勝では、ワンチャンスをものにされて0対2で惜敗。初の決勝進出を逃しました。

「甲子園での戦い方と県大会の戦い方。私はその二つを変えるべきだと思っています。『普段通りの野球をやる』あるいは『よそ行きの野球をやる』と言う方もいますが、私は甲子園には甲子園の戦い方があろうと思っています。そういう意味では、相手の延岡学園の方が一枚上手でした。例えば、試合状況を感じ取る力。言わば、その試合での情報や空気を察知する力ということになるんですが、そこでの対応力が準決勝に関しては足りなかったと思います。対応力の差が敗因の一つだったと思います」

ます。いろいろなものと戦いながら、いろいろなことに対応しなければ日本一にならない。昨年の甲子園を通して、私はそう感じました」

### 昨年夏は

### 初めてづくしの

### 09年夏とは

### 明らかに

### 違いました

——改めて、昨夏の甲子園ベスト4という結果を振り返って思うことは？

「大会期間中、そしてそれ以降も、全国の4校に残ったという実感はありませんでした。一戦一戦を戦っていたというのが、そういう思いにさせるのかもしれない。また、夏の甲子園ベスト4は花巻東高校としては2度目でした。私自身も2度目の経験ということからすれば、昨年夏は初めてづくしの09年夏とは明らかに違いました。もちろん、喜びは一緒ですが、2度目となると求められるものが高くなりますし、我々も求めるものが高くなる。そうい



2009年以來の甲子園4強を果たした佐々木監督は、13年夏のチームを「変幻自在に戦えるチーム」と称した。そして、指揮官は力強く言う。「我々の花巻東は、これからも日本一を目指していきます」

う感覚にならないと、日本一にはなれない。さまざまな壁にぶつかりながら、チームは強くなっていくんだろう。そんなことも感じた夏でした。私が監督になった当初は、

県大会ベスト4が続きました。県内で『ベスト4監督』と言われていた時期もありました。その時は、県4強になるのを目指して。でも、県大会で優勝し、甲子園

でも勝たせてもらう中で私自身、そしてチームの感覚は大きく変わってきました。今、夏に関して言えば『甲子園ベスト4』で敗れ、その大きな壁が我々の前に立ちほだかっています。それは、私が監督就任当初に味わったような、ひとつの試練だと思っています。日本一になるためには、その試練を乗り越えなければいけない。ただ、これまでそうだったように、たとえ大きな壁でも必ず乗り越えられる。そして、その先に日本一が待っている。そう信じて、これからも戦っていきたいと思っています。そういう中で、2013年夏の軌跡は、これからの花巻東にとって、ものすごく大きな財産になりました。我々の花巻東高校は、これからも日本一を目指して行くわけですが、彼らが残してくれた財産は相当なものがあつたと思います。もしこの先、日本一になれることがあつたとしたら『彼らの経験があつたからこそ』だと言えます。そして将来、日本一になったチームの選手たちに私はこう言うでしょう。『あなたたちだけで勝つたのではないよ』『すべての先輩たちに感謝しなければいけないよ』と。09年のチームが作ったもの、そして13年のチームが築いたもの。それらもあつて『日本一があるんだ』と。あるいは、敗れて涙を流した先輩たちの軌跡もまた、これからの大きな力になる。たとえば、大谷たちの代が残したのもそうです。それらすべてが土台となつて、花巻東の日本一があると思っています」

# 先輩からのメッセージ

プロ野球の世界で活躍している花巻東野球部の二人の先輩からも後輩たちへの祝福のメッセージが届きました。



北海道日本ハムファイターズ

大谷翔平  
選手

SHOHEI OTANI



埼玉西武ライオンズ

YUSEI KIKUCHI

菊池雄星  
選手

# 最高の仲間と 一緒に過ごした 最高の夏



埼玉西武ライオンズ

## 菊池雄星選手

YUSEI KIKUCHI

花巻東高校での3年間は、僕の原点です。また、岩手で生まれ、その人々に育ててもらったという思いは、プロの世界に入っても決して忘れたことはありません。

昨年末には、大谷とともに「ふるさと復興応援ステージ」と題したイベントを花巻市総合体育館で開催させていただきました。その野球イベントには、市内だけではなく東日本大震災で被災した釜石市や大槌町の小・中学生も駆けつけてくれる中で約3千人もの方々が集まってくださいました。そこで僕は、岩手への感謝の気持ちを再認識し、花巻東高校で過ごした月日を改めて思い出しました。また、自分自身のプレーを通して、その感謝の気持ちを伝えたい、微力ながらも岩手の力、そして母校の力になりたいと思っていました。

昨年2013年は、母校の後輩たちがその一翼を担ってくれました。毎年のように戦績は気になるものですが、昨年夏の甲子園も勝つたびに嬉しかったですし、僕が高校3年の2009年夏と同じベスト4まで上り詰めた時は、先輩として彼らが誇らしく思え

ました。最後は準決勝で敗れましたが、彼らのプレーや言葉からは、支えてくれる人々への感謝の気持ちが伝わりましたし、逆にその姿が勇気や感動を与えていたと思います。

僕にとって、花巻東高校で出会った仲間が今でも一番の宝物です。昨年夏を駆け抜けた後輩たちも、生涯の宝物になる最高の仲間と一緒に、最高の夏を過ごすことができました。それは、卒業後も決して忘れずに、いつまでもたいせつな記憶として持ち続けて欲しいと思っています。僕にとっての2013年は、自己最多の9勝をマークして飛躍の足がかりを掴んだたいせつな一年になりました。手答えを感じましたし、自信にもなりました。ただ、後半戦はケガで離脱し、チームが一番苦しい戦いを強いられる9月・10月にマウンドにいなかったことが悔しかった。だからこそ、2014年はさらにレベルアップして、1シーズンを通して先発のローテーションを守りたい。チームのために投げ続けたいと思っています。花巻東高校とともに、今シーズンはさらなる飛躍の年になるように精一杯頑張ります。



# たくましく成長した 後輩たちが 頼もしく思えた

北海道日本ハムファイターズ

## 大谷翔平 選手

SHOHEI OTANI

「岩手から日本一」を目指した高校時代。僕は高校3年(2012年)の夏に、甲子園出場を果たすことができませんでした。岩手県大会決勝で敗れた時は、頭が真っ白になり、悔しさだけが残りまして。その約1年後。花巻東高校とともに汗を流し、僕らの思いを受け継いだ後輩たちが、1年前の悔しさを晴らしてくれました。

僕が在学中の2012年秋。彼らは県大会緒戦で敗れました。その時、悔しさと不甲斐なさに包まれた後輩たちの姿を、僕は間近で見っていました。でも、彼らはそこから強くなった。ひと冬越え、春を経て、夏には大きな花を咲かせた。2年ぶりの甲子園出場が決まった時は、たくましく成長した後輩たちが頼もしく思えました。2013年、夏。彼らは甲子園でさらに強くなりました。テレビなどを通じて応援するしかありませんでしたが、勝利を一つひとつ積み重ねていくたびに嬉しさが込み上げてきました。身近な存在、知っている顔が甲子園で輝いている。母校である花巻東高校が、全国の舞台でその名を知らしめている。卒業生としてそれは嬉しいことでしたし、プロ1年目のシーズンを戦う中で刺激になり

ました。また、故郷を離れて間もない中で「岩手」や「母校」をものすごく身近に感じられたことは、僕にとって大きな力になりました。

岩手、そして母校への思い。それは、雄星さんも同じだと思いますが、僕の中でしっかりと根付いています。生まれ育った岩手、人間的にも成長させてくれた母校は、感謝しきれないほどにお世話になった場所です。2013年のシーズンでは、岩手から北海道に駆けつけて応援してくださいました。方々がたくさんいました。それは嬉しかったですし、その声援に僕は支えられました。

プロ2年目となる2014年は、僕にとってたいせつな一年になります。投手としては二ヶタ勝利を目指し、打者としてもチームの勝利に貢献できる一打を数多く打ちたい。昨年夏の甲子園で活躍した後輩たちと同様に、プロでしっかりと結果を残す姿が大好きな岩手と母校に関わる方々の力になるように頑張りたい。そして、花巻東高校が掲げる「岩手から日本一」の目標が、いつか必ず達成されることを信じてながら、僕も同じように大きな選手になっていきたいと思っています。



生徒の気質が変わっていく中で、その原動力になってきたのが野球部でした。高校野球には、昔ながらの「高校生としてのあるべき姿をプレーで表現する」という精神が、今なお色濃く残っています。それに拍車をかけ、本校野球部の子どもたちはさまざまなシーンで率先した行動や明るいあいさつを交わしてくれる。また、日々行なっている部室のトイレ掃除や遠征先や宿舎、またその付近でも行なうゴミ拾いなど、彼らは野球を通して本校の教育理念を実践し表現しています。さらに試合中のプレーで言えば、最後まで決して手を抜かず一生懸命に一塁ベースを駆け抜けるあの全力疾走、あるいは最後の最後まで諦めずに、自身の120%の力を出し切ってプレーする爆発力と粘り強さとひたむきさ、果敢に盗塁を狙う俊敏な判断力、仲間を信じ仲間をサポートするチームワーク、苦しい時こそ明るく笑顔のベンチワーク、指導者と選手との厚い絆、そして誠実さと謙虚さと礼儀正しさ等々は、まさに本校の追い求める教育理念でもあり、彼らはそれを野球というスポーツを通して具現化してくれているものと思っています。そんな本校の模範生たちは、他の生徒たちにも多大な影響を与え、

学校全体をリードする存在になっています。

昨夏の甲子園でも、ベンチ内の姿が象徴するようにチームワークで躍動しました。一人では何もできない。みんなが同じ目標に向かい、一つになっていかなければ大きな成果を生み出すことはできないのです。今回の甲子園でも、そのことを改めて示してくれたと思います。常に野球部は、本校の教育理念を体現している。そう言っても過言ではないと思っています。

本校の生徒には、常に大きな志を持ち、社会のために世のため、に尽くし、自らの力を役立てられる人間になってもらいたい。そのためにも、高校3年間で勉強や部活動・委員会活動をして日々の生活を通して人間力を磨き上げる。それは、本校が求める「立志夢実現教育」の大きな柱でもあり、今後またいっせつにしていきたいテーマのひとつでもあります。

生徒には、人生の基盤となるものを本校で身につけてもらいたい。そして卒業後、社会に大きく羽ばたいていくことを常に願っています。



野球部専用のトレーニングルーム。その天井には、各選手の目標が数々詰められている。目標に向かい体と精神を鍛えるその一室では、毎日のように選手たちの魂がぶつかり合う

# 資料編

## 2013年度花巻東高等学校硬式野球部 部員名簿

学年	氏名	出身中学
3	岩館佳佑選手	矢巾中
3	山下駿人選手	一戸中
3	松下拓也選手	六郷中
3	中里優介選手	軽米中
3	高橋直輝選手	和賀東中
3	金澤大地選手	大野第一中
3	吉田匠選手	見前中
3	杉沢雄大選手	浄法寺中
3	高橋比呂選手	江刺第一中
3	向久保拓選手	滝沢第二中
3	佐藤憂我選手	沢内中
3	泉澤直樹選手	北陵中
3	照井希望選手	宮守中
3	昆直弥選手	遠野中
3	武田大生選手	末崎中
3	河野幹選手	宮守中
3	高杉恭平選手	紫波第二中
3	小林勇大選手	大湊中
3	三原龍騎選手	塚越中
3	菊池天選手	滝沢第二中
3	鹿糠俊輝選手	久慈中
3	吉野翔稀選手	曙川中
3	岸里亮佑選手	長内中
3	千葉翔太選手	南都田中
3	高橋雅人選手	木更津中
3	伊藤智也選手	重茂中
3	林達夢選手	種市中
3	前川峻選手	釜石東中
3	武藏勇哉選手	滝沢第二中
3	高橋茂樹選手	矢沢中
3	多々野将太選手	桜丘中
3	阿部友哉選手	宮野目中
3	島山真寿選手	宮守中
3	山蔭悠平選手	宮守中
3	小笠原理貴選手	釜石東中
3	鈴木奨悟選手	松尾中
3	菊池風雅選手	山目中
3	佐々木阜成選手	一関東中
2	浅野那歩選手	甲子中
2	阿部祐弥選手	釜石東中
2	磯谷博也選手	赤崎中
2	市村優多選手	吉浜中
2	伊藤永大選手	安代中
2	伊藤将太選手	附馬牛中

学年	氏名	出身中学
2	岩渕新之助選手	一関中
2	遠藤諒選手	川崎中
2	及川康大選手	湯本中
2	及川翔選手	花巻中
2	大木駿牙選手	花巻中
2	太田亮佑選手	見前中
2	大向繁利選手	長内中
2	岡駿哉選手	植田東中
2	小熊雄飛選手	宮古西中
2	小野寺主馬選手	一関中
2	小野寺優生選手	九戸中
2	小野寺祐人選手	水沢南中
2	菊池健人選手	江刺東中
2	岸里現輝選手	滝沢南中
2	久保田航亮選手	湯口中
2	熊谷大志選手	玉山中
2	今野太郎選手	矢巾北中
2	齋藤成斗選手	一本木中
2	佐々木混哉選手	崎山中
2	佐々木竜次選手	しらかし台中
2	佐々木亮選手	松園中
2	佐々木悠平選手	岩泉中
2	佐藤光選手	矢中中
2	佐藤颯選手	一本木中
2	佐藤航選手	東和中
2	高橋恭兵選手	石鳥谷中
2	高橋智彦選手	花巻中
2	藤岡幹太選手	大阪 曙川南中
2	古舘幸太選手	水沢南中
2	細川稔樹選手	矢巾中
2	本間惇也選手	神奈川 塚越中
2	三浦哲聖選手	大平中
2	箕浦文瑠選手	宮城 東和中
2	茂木和大選手	水沢南中
2	森子椋太選手	普代中
2	八木光巨選手	宮古河南中
2	吉崎正太選手	厨川中
1	伊藤駿選手	遠野中
1	小野光太選手	田野畑中
1	小原諒選手	江刺第一中
1	小野寺一磨選手	藤沢中
1	鎌田海斗選手	宮野目中
1	神田充希選手	花巻中
1	菊田直希選手	末崎中

学年	氏名	出身中学
1	佐々木勇哉選手	大船渡第一中
1	福地基選手	北上北中
1	古谷耀選手	秋田 生保内中
1	村上将太選手	高田第一中
1	門崎愛紀選手	吉里吉里中
1	山口優二選手	赤崎中
1	浦島大樹選手	釜石東中
1	小笠原正博選手	吉浜中
1	菊地真弥選手	夏井中
1	佐藤孝選手	日頃市中
1	田老麗希選手	崎山中
1	千田京平選手	赤崎中
1	中平春選手	宮城 高砂中
1	松本一真選手	田老第一中
1	山根幸選手	崎山中
1	柏木昂弥選手	宮城 唐桑中
1	川村和喜選手	飯岡中
1	菊地律希選手	山目中
1	昆太一選手	東陵中
1	佐藤唯斗選手	岩泉中
1	須藤寿進選手	埼玉 幸手西中
1	田中啓太選手	城東中
1	千葉大輔選手	綾里中
1	星野直椰選手	東京 小松川第二中
1	石崎皓大選手	東京 駒留中
1	加倉侑輝選手	田老第一中
1	高橋樹也選手	西南中
1	多々野航太選手	宮城 桜丘中
1	千葉健太郎選手	唐丹中
1	藤田将之選手	江釣子中
1	松岡大晴選手	舞川中
1	吉田航太選手	滝沢第二中
1	坂成海選手	夏井中

### スタッフ

- 部長 流石裕之
- 監督 佐々木洋
- コーチ 鎌田茂  
松田優作  
高橋一輝  
菊池豊
- マネージャー  
及川ひな(2年 水沢南中出身)  
伊藤瑞貴(1年 重茂中出身)



# 花巻東高等学校硬式野球部甲子園大会 (第95回全国高等学校野球選手権記念大会) 出場支援協議会組織図

(敬称略) H25.7.26

顧問	支援協議会	参与
岩手県議会議員	名誉会長 花巻市 市長	花巻市議会議員関係
〃	会長 花巻商工会議所 会頭	花巻市農協関係
〃	副会長 学校法人花巻学院 理事長	各金融業関係
〃	〃 花巻東高等学校 校長	医師会関係
花巻市議会議長	〃 PTA会長	歯科医師会関係
花巻農業協同組合代表理事組合長	〃 同窓会会長	建設業関係
花巻市教育委員長	〃 野球部OB会会長	商工会議所関係
前花巻市教育委員長	〃 野球部父母の会会長	観光協会関係
花巻市教育長	〃 スポーツ後援会会長	花巻市体育協会関係
(一社)花巻観光協会会長	〃 教職員OBG会会長	花巻市野球協会関係
花巻市体育協会会長	〃 野球部父母の会前会長	花巻市倫理法人会関係
花巻工業クラブ会長		花巻市校長会中学校部会関係
花巻市倫理法人会相談役		理事・評議員
岩手大連友好協会副会長		歴代校長
学校法人花巻学院顧問		歴代野球部父母の会会長関係
		教職員OBG会関係

募金実行委員会			監事				
委員長	学校法人花巻学院理事	伊藤 實	<b>岡田英朗 (PTA)</b> <b>柏田基嗣 (同窓会)</b> <b>富田 勲 (スポーツ後援会)</b>				
副委員長	校長	小田島順造					
〃	PTA会長	河野 純					
〃	同窓会長	滝田 吉郎					
〃	野球部OB会会長	二ツ家辰身					
〃	野球部父母の会会長	河野 純					
〃	スポーツ後援会会長	鎌倉 玄悦					
〃	教職員OBG会会長	佐藤 宥弘					
〃	野球部父母の会前会長	菊池 雄治					
〃	ソフトボール部後援会長	佐藤 博和					
参与	副会長	加藤貝衣子				高橋 祐司	高橋 年徳
〃	〃	高橋 雅晴				鎌田 明彦	鎌倉 公順
〃	〃	畑村 強人				上平 勉	
〃	〃	鹿糠 光雄	阿部 和彦	泉澤 幸彦			
〃	〃	伊藤 和憲	藤井 享	吉田 充			
〃	〃	松岡 武夫	昆野 大樹	菅木 賢治			
〃	〃			伊藤 吉守			

統括実行事務局			● 指揮		● 支援協議会の結成解散	
事務局 局長	副校長	大森 松司	● 各係の調整	● 諸申請	● 補助金申請	● 記念誌作成
事務局 次長	事務局長	小原 康則	● 渉外	● 企画と日程計画	● その他	● 役員住所録の作成
〃	生徒部長	伊藤 新也	● 出場決定報告会	● 記念品関係		
事務局 員	指導監	目時 隆士				
〃	総務部長	木村 司	事務局 員	教諭	中 順子	
〃	学務部長	佐藤 吉文	〃	教諭	松本 旬平	
			〃	常勤講師	中島 宏之	
			〃	事務	藤原 章裕	

庶務部	式典・行事部	応援団部	募金活動部	広報・宣伝部	会計部
◎佐藤 吉文 ○木村 司 ○岡村 知典 ○夏井 友也 (教務課)	◎木村 司 ○伊藤 新也 ○高橋 浩 ○森橋 健哉 (総務課・進学課)	◎伊藤 新也 ○中 順子 ○似内 圭介 ○小原 勝也 (生徒部)	◎小原 康則 ○菅原 司 ○木村 司 ○齋藤 照美 (就職課・総務課・保厚課)	◎伊藤 新也 ○大森 松司 ○菅原 善浩 ○中村 祐和 (学メセ・入試広報室)	◎小原 康則 ○高橋真由美 ○高橋 修一 ○木村 司 (事務部)

- |   |   |  |   |   |   |
|---|---|--|---|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>● 各種文書の作成</li> <li>● 各種文書の受信発信</li> <li>● 各種文書の綴り</li> <li>● 祝電その他の收受</li> <li>● 旧職員住所録の作成</li> <li>● その他</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 表敬訪問の調整</li> <li>● 壮行会および出発式</li> <li>● 生徒会諸行事企画</li> <li>● その他</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 応援参加要項作成</li> <li>● 応援団組織作成</li> <li>● 配車</li> <li>● 吹奏楽部員の育成</li> <li>● 応援リーダーの育成</li> <li>● 応援指導</li> <li>● 応援用具の調達</li> <li>● その他</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 募金計画立案</li> <li>● 募金活動全般</li> <li>①募金先の選定</li> <li>②担当者の決定</li> <li>③その他</li> <li>● その他</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 広報活動</li> <li>● マスコミ対応</li> <li>● グッツ関係</li> <li>● 垂れ幕・横断幕の設置</li> <li>● 広告・記録</li> <li>● その他</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 予算書・決算書の作成</li> <li>● 募金・物品の收受</li> <li>● 募金業務に係る</li> <li>● 会計全般</li> <li>● 各種支出等に係る</li> <li>● 会計全般</li> <li>● 支払決議書等の管理</li> <li>● その他</li> </ul> |
|---|---|--|---|---|---|



# 資料編

## 平成25年 硬式野球部甲子園出場関係諸行事一覧

月 日	行事名	備考
7月15日(月)	戦績 2回戦 花巻東 18-1 金ヶ崎	
17日(水)	3回戦 花巻東 6-2 久慈	
20日(土)	4回戦 花巻東 9-1 花巻南	
21日(日)	準々決勝 花巻東 8-1 久慈工業	
24日(水)	準決勝 花巻東 4-3 盛岡第四	
26日(金)	決勝 花巻東 5-1 盛大附属	
	優勝を決める12:10～	
	優勝報告会16:00～	花巻市総合体育館アネックス
	優勝祝賀会17:30～	ホテルグランシエール花巻
7月29日(月)	優勝旗・賞状等受領披露式12:30～, 花巻市長への表敬訪問15:00～	花巻東高等学校第一アリーナ
	校内にて甲子園出場対策協議会説明会／教職員	
	花巻東高等学校硬式野球部甲子園大会 出場支援協議会活動開始総会18:30～	花巻東高等学校サテライン受講室
7月30日(火)	表敬訪問	私学協会10:00 岩手日報社10:30 県庁11:15 テレビ岩手13:00 NHK13:30 IBC放送14:00 朝日新聞盛岡支局14:30 IAT15:00 めんこい16:00 岩手高野連16:30
	募金活動開始	
7月31日(水)	壮行式9:00～	花巻東高等学校第一アリーナ 全校生徒・教職員
8月1日(木)	出発式8:30～ 出発10:10	花巻空港 支援協議会・教職員・野球関係諸団体・その他
	宿舎到着13:00	チサンホテル神戸
8月2日(金)	全農いわて・JA花巻による米・肉等の贈呈激励式	花巻東高等学校第一会議室
8月3日(土)	公式練習10:00～	阪神甲子園球場
8月5日(月)	組み合わせ抽選会 16:00～	対戦相手および試合日程決定、フェスティバルホール
8月6日(火)	応援についての打ち合わせ会	生徒登校日
8月7日(火)	開会式リハーサル9:00～	阪神甲子園球場
8月8日(木)	開会式9:00～	阪神甲子園球場
8月12日(月)	大応援団出発18:00～	
8月13日(火)	2回戦 彦根東高校と対戦し、9対5で勝利する 抽選会	
8月14日(水)	大応援団一旦帰校する8:00～	
8月16日(金)	大応援団再度出発する15:00～	
8月17日(土)	3回戦 済美高校と対戦し、7対6で勝利する 抽選会	阪神甲子園球場
8月19日(月)	準々決勝戦 徳島鳴門高校と対戦し、5対4で勝利する 第68回国民体育大会(東京大会)への出場決まる	阪神甲子園球場
8月21日(水)	準決勝戦 延岡学園高校と対戦し、0対2で敗れる	阪神甲子園球場
8月22日(木)	大応援団帰校8:40～	花巻東高等学校
8月24日(土)	出場報告会(ベスト4) 17:00～	花巻市総合体育館
9月4日(金)	第68回国民体育大会の組み合わせ決まる 9月9日(月)	
9月9日(月)	岸里亮佑選手がプロ志望届を提出	
9月26日(木)	国民体育大会出場のため、東京に出発	花巻東高等学校
9月30日(月)	1回戦 鳴門高校と対戦し、1対11で敗れる	八王子球場
10月24日(木)	里亮佑選手を北海道日本ハムファイターズが ドラフト7位で指名する	
11月24日(日)	岸里亮佑選手が 北海道日本ハムファイターズに入団する	
1月23日(金)	鹿糠俊輝選手が2013年度日本学生野球協会の優秀 選手に選出され、伝達式が行なわれる	花巻東高等学校応接式

## 「夢」と「目標」

その二つの言葉はともに、将来的に実現させたいと願う事柄を指す。ただ、夢にはそれまで体験したことのない事柄を推し量る「想像」や、まだ見ぬ世界に憧れを抱く「空想」という要素が含まれる。一方の目標は、夢とはまた違った意味合いを含む。ある辞書では、目標の定義をこう記す。《行動を進めるにあたって、実現・達成を目指す水準》

願いを達成するために、自らが突き動く。すなわち、はっきりとしたイメージの先に明確な行動力や実践力を持つことができるのが目標だ。

夢から目標へ——。今、花巻東高校には甲子園で「日本一を獲る」という明確な目標がある。岩手県大会で涙を流し続けた時代を経て、甲子園の常連校になった。また、全国で勝つ難しさを味わった時代を経て、甲子園で勝つ術を育んできた。勝利と敗北を繰り返しながら、すべての経験がチームの血となり肉となり、「日本一」という目標が生まれてきた。

2013年の夏も、彼らは頂を目指して一歩ずつ険しい山を登り続けた。

「甲子園には甲子園の戦いがある」

そう語る佐々木洋監督の下、甲子園4強まで勝ち上がった。ここ数年の甲子園と明らかに違ったのは、小さな個を集結させたそのチーム構成だった。突出したスーパースターはいなかった。それでも、勝ち進むたびに大きな「和」となり、日本一に近づいた。そこには、新たな「花巻東のスタイル」があった。

昨夏の経験を経て、チームの目標は一段とはっきりしたものになった。また、これから後輩たちが歩む軌跡の中で、昨夏のチームが残したものは大きな力になっていくはずだ。「岩手から日本一」の合言葉は、これからも変わらない。その目標に向かってチームは再び歩を進める。そして、その歩みを見守り、応援し続ける我々は、彼らの姿に夢を抱き続ける。

ライター 佐々木 亨



# 花巻東

硬式野球部甲子園出場記念誌  
2013

あきらめない勇気で  
勝ち取った  
甲子園ベスト4



甲子園には魔物が棲すんでいるという話をよく聞く。  
でも、その魔物とは、自分自身の心の奥底に棲すんでいる生き物……。  
重圧に負け、自分の弱い部分が出てきた時、  
自分の中の魔物が目を覚ます。

秋・春の敗退から、苦しみ、悩み、そして、多くの事を学び、  
よりいっそう自分自身を追い込み、技術を磨き、人間力も磨いてきた。

魔物を心の奥底へと閉じ込めたのだ……。

苦楽をともにしてきた仲間たちと、1日でも長く野球をしたい。  
仲間を応援したい。  
その部員全員の思いが、チームを、“こころをひとつ”にさせ、  
甲子園での花巻東の快進撃を後押しさせてくれた。

仲間たちのために……。  
この仲間たちとなら……。

彼らは持てる力を、すべての力を甲子園で出してくれた。  
“岩手から日本一”……には手が届かなかったが、間違いなく  
“日本一熱い野球魂”を見せてくれた。

地道に努力し続けることのたいせつさ  
そして、改めて全員野球のすばらしさを教えてくれた。  
君たちが流した涙を決して忘れない……。

たくさんの夢と感動をありがとう。

“あきらめない勇気があれば、いつか夢は実現する”

硬式野球部父母の会 高橋拓也氏  
(高橋樹也選手の父親で、平成2年夏に甲子園出場している)

【発行日】  
平成26年1月15日

【発行者】  
花巻東高等学校硬式野球部  
甲子園出場支援協議会  
〒025-0066 花巻市松園町55番地1  
TEL.0198-41-1135 FAX.0198-41-1136  
E-mail higasiko@hanamakhigasi-h.ed.jp

写真提供 松橋隆樹 松本晃  
岩手日報社

編集 スタンダード編集部

ライター 佐々木亨

アート  
ディレクター 和野隆広

印刷 山口北州印刷株式会社



花卷東高等学校